

旧円覚寺仁王像復元制作に関する研究

園原 謙 長谷洋一 岡田 靖 上江洲安亨 大山幹成
門叶冬樹 園部凌也 山田千里 本多貴之 宮腰哲雄

A study of the Reconstruction Production of the Kongo-Rikishi(Nio) Statue at Enkaku-ji Temple.

Ken SONOHARA Youichi HASE Yasushi OKADA Yasuyuki UEZU Motonari OHYAMA
Fuyuki TOKANAI Syunya SONOBE Senri YAMADA
Takayuki HONDA and Tetsuo MIYAKOSHI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第11号別刷

2018年3月30日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.11
March, 2018

旧円覚寺仁王像復元制作に関する研究

園原 謙¹⁾ 長谷洋一²⁾ 岡田 靖³⁾ 上江洲安亨⁴⁾ 大山幹成⁵⁾ 門叶冬樹⁶⁾ 園部凌也⁷⁾ 山田千里⁸⁾
本多貴之⁷⁾ 宮腰哲雄⁷⁾

A study of the Reconstruction Production of the Kongo-Rikishi(Nio) Statue at Enkaku-ji Temple

Ken SONOHARA¹⁾, Youichi HASE²⁾, Yasushi OKADA³⁾, Yasuyuki UEZU⁴⁾, Motonari OHYAMA⁵⁾,
Fuyuki TOKANAI⁶⁾, Syunya SONOBE⁷⁾, Senri YAMADA⁸⁾, Takayuki HONDA⁷⁾ and Tetsuo MIYAKOSHI⁷⁾

Abstract

The Ryukyu Kingdom cultural heritage integration and reconstruction project was primarily implemented by the Okinawa Prefectural Museum & Art Museum from 2015 to 2021.

This project was not only funded by the Japanese government cabinet but it also contributed to Okinawa's promotional plan.

There has been many lost *te-waza's* such as painting, carving (wood and stone), arts and craft (lacquerware, pottery, Dyeing and weaving, metalcraft and sanshin) since the post-war. The production of the *te-waza's* production skills needed to be revitalized especially because it represents Rykyu/Okinawa culture. In other words, the process enables the cultural properties to be manufactured in the 21st century.

In the era of the Kingdom of Ryukyu, there was a Kaizuri-bugyosho office which was the center of manufacturing, and there the workmen crafted the gifts for the Emperor of China and the General of Japan. The center was a national prestige for the Kingdom.

Originally, the operation's purpose of Kaizuri-bugyosho office was to decorate and build the temples and shrines in addition to producing and managing artifacts, art and crafts.

The project emphasizes reconstruction of the Kingdom of Ryukyu's *te-waza* (hand-made) to the world. In addition, the power of a world-class brand of the Kingdom of Ryukyu *te-waza* calls for the

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006 Japan

²⁾ 関西大学 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Kansai University, 3-3-35 Yamate-cho, Suita-shi, Osaka 564-8680 Japan

³⁾ 一般社団法人木文研 〒465-0083 愛知県名古屋市中東区神丘町2丁目7番地の3

Wooden sculpture Cultural properties Conservation Laboratory, 2-7-3 Kamioka-cho, Meito-ku, Nagoya, Aichi, 465-0083 Japan

⁴⁾ 一般財団法人沖縄美ら島財団 〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町1-2

Okinawa Churashima Foundation, 1-2 Kinjo-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0815 Japan

⁵⁾ 東北大学学術資源研究公開センター植物園 〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内12-2

The Center for Academic Resources and Archives, 12-2 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 980-0862 Japan

⁶⁾ 山形大学高感度加速器質量分析センター 〒999-3101 山形県上山市金瓶湯尻19-5

Analysis of mass of Yamagata University high sensitivity accelerator center, 19-5 Kanakame yujiri, Kaminoyama, Yamagata 999-3101 Japan

⁷⁾ 明治大学院理工学研究科 〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

Meiji University, 1-1-1 Higashimita, Tamaku, Kawasaki, Kanagawa 214-8571 Japan

⁸⁾ 明治大学研究知財戦略機構 〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

Meiji University, 1-1-1 Higashimita, Tamaku, Kawasaki, Kanagawa 214-8571 Japan

attention not only for the people who live in Okinawa, but also to those who live outside of Okinawa. Moreover, it would help appeal the brand of the Kingdom of Ryukyu culture as well as the cultural sightseeing spots. Therefore, this project would greatly contribute and promote Okinawa's cultural attractions furthermore.

As a planning continues each year, each section has come up with the craft list, in what's the most representable of the Ryukyu culture and started the reconstruction documents.

The criteria for selecting the crafts was following: It must have been lost or broken cultural post-war assets, elaborated *te-waza*(hand-made) prior to the war, and represent the kingdom's culture.

According to the criteria, the imitation of the Kingdom's reconstruction of culture will be from 2016 to 2019. Additionally, items (crafts) which were reconstructed in modern times will be exhibited from 2019 to 2021.

In this article, the study of the reconstruction production of the Kongo-Riskishi (Nio) wood craft statue at Enkakuji-Temple was sectoried in ninth chapter as below.

First, the statues that were contributed in these studies were forwarded by Sonohara. Second, the view of reconstruction and the analysis of component of the Kongo-Riskishi (Nio) statue at Enkakuji-Temple written by Sonohara and Okada. Third, the history of Enkakuji-Temple and the Kongo-Riskishi (Nio) written by Uezu. Forth, the survey on the subject of the Kongo-Riskishi(Nio) statue prior the war by Sonohara. Fifth, the analysis of components of incomplete remaining of the Kongo-Riskishi (Nio) statue by Okada, Ohyama, and Tokanai. Sixth, the analysis of colorant by Sonobe, Yamada, Honda and Miyakoshi. Seventh, the reference example regarding reconstruction by Hase. Eighth, reconstructing strategy and production process done by Okada. the conclusion done by Sonohara and Ueze.

1. はじめに

琉球王国文化遺産集積・再興事業は、平成27年度(2015)～平成33年度(2021)までの7カ年計画で、沖縄県立博物館・美術館が事業主体となって実施するソフト事業である。本事業は、内閣府が提供する沖縄振興特別推進交付金、いわゆる「一括交付金」を用いて実施するもので、沖縄振興を図るための事業でもある。具体的には、国内で唯一の王国文化を表象するために、戦災や戦後生活によって失われた相伝の8分野の「ティーワジャ(手わざ)」【絵画、彫刻(木彫、石彫)、工芸(漆芸、陶芸、染織、金工、三線)】の制作工程を含めた技術を現代に甦らせるもので、それらをもって、いわば21世紀版の文化財を製作するものである。琉球王国時代、国家の威信をかけて進貢品や献上品などのモノづくりに努めた、いわば制作拠点であった王府貝摺奉行所があった。その主な業務は、寺社や建造物の装飾、工芸品の図案制作、美術工芸品を仕上げる工房兼の役所であった。貝摺師(螺鈿細工など)、絵師(南画など)

檜物師、磨物師、木地引勢頭、御櫛作、三線打、矢矯などの職人を管理統括していた。そこには、琉球王国を代表する精緻で至高の手わざが継承されていた¹⁻¹。

この事業では王国の手わざの世界を再現することにある。合わせて、世界に誇る琉球・沖縄の手わざの力を、モノを通して内外へ発信し、県民のより一層の文化力の発信を図り、琉球王国文化をブランド化とした文化観光拠点としての沖縄をアピールし、もって沖縄振興に寄与するという壮大な事業である。

年度毎の計画では、27年度に各分野で何を制作することが王国文化を表すことができるかという制作物一覧をつくとともに、その実施設計を行った。制作物の選定基準には、沖縄戦で喪失した文化財であること、戦前に失われた手わざであること、王国文化を体系化する上で必要と認められる手わざが用いられているものなどとした。それに基づいて、28年度～31年度の4か年計画で、王国文化遺

産の再興による模造復元品を60件以上制作する予定である。合わせて、31年度から33年度の3カ年で、それら現代に甦った制作技術や成果品の展示公開を行いたいと考えている。

本稿では、8分野のうちの木彫分野の旧円覚寺仁王像の復元制作に関わる内容について次のとおり執筆を分担した。1.はじめに（園原）、2.復元の背景と当館所蔵の残欠部材の状況（園原、岡田）、3.円覚寺の歴史と総門仁王像（上江洲）、4.戦前に仁王像をみた古老たちの聞き取り調査（園原）、5.仁王像残欠部材の材質調査と年代測定の知見（岡田、大山、門叶）、6.仁王像に使われた色材の科学分析の知見（園部、山田、本多、宮腰）、7.円覚寺金剛力士像の模造復元における参考事例（長谷）、8.復元の制作方針と制作工程の現在の状況（岡田）、9.まとめにかえて（園原、上江洲）。

2. 復元の背景と当館所蔵の残欠部材の状況

2-1. 先行研究

円覚寺仁王像の復元に関わる先行研究はこれまでになく、本事業がその先駆けになる。ただ、現在当館に所蔵されている円覚寺関係の残欠資料の総合的な調査は、文化庁補助事業として平成9年から12年までの3カ年計画で実施した。その事業主体は、沖縄県教育庁文化課（現文化財課）で、「旧円覚寺美術工芸関係資料調査」と銘打って行ってきた。この調査の目的は2つあった。一つは、旧円覚寺関係の美術工芸品に関しては、梵鐘3口が重要文化財に指定され、白象と放生池石橋勾欄羽目が彫刻品として県指定されているが、それ以外の木彫彫刻品や戸板など残欠資料が多くあり、その実態を把握し、指定等による保存対策を行うこと。もう一つは、円覚寺の実態を把握するため、国宝指定を受けた昭和8年の指定当初の図面や写真、古文書関係資料を調査、収集、分析を通して円覚寺の詳細を把握することであった²⁻¹。

それ以前には、復帰直後の昭和48年に西川杏太郎氏によって、残欠資料の整理、調査の指導が行われ、津波古聡氏（当館学芸員）によって再調査が行われただけであった。

当時、この文化庁事業の沖縄県（文化課）の担当者が筆者であり、この事業の最終年に首里の博物館

（旧博物館）へ人事異動し、日常的に収蔵庫の中に保管される文化財の欠片資料を目にすることになった。同報告書作成にあたり、写真撮影を行う必要があったが、その欠片を見るたびに心が痛んだ記憶が残っている。残念ながら、これら資料を組み合わせ、復元をするという発想は当時はなかった。何故なら、最も肝心の頭部が無いことが復元を行う上で大きな障害になることが分かっていたからである。ただ、この仁王像の欠片の部位確定を含め、原状回復ができればいいなという漠然とした気持はあった。

当館の博物館史を学ぶうちに、戦後、命からがら米軍の収容所から出て間もない頃、今日食えることにも欠く状況の中で、廃墟の中から、首里の文化財の欠片の収集に努めた博物館関係者の先輩方に思いを馳せるとき、ある種の衝撃が走った。これら資料が存在することが、奇跡であることを理解した。また、戦前に仁王像をご覧になられた方が存命のうち、彼らの記憶の裏付けを得ながら、調査研究に基づき欠片の意味を理解し、元の形を取り戻すことが、収集した先輩学芸員、ひいては戦争で失われた多くの県民の思いに報いることだと考えるにいたった。本事業の実施にあたり戦災文化財復元のシンボルのひとつとして位置づけ、平成10年来の既述調査からの知人である長谷洋一氏（関西大学）の協力をいただき、仁王像の復元プロジェクトを始動することになった。約20年ぶりに仁王像に関わることも、何かしらの縁を感じる。

2-2. 旧円覚寺仁王像の残欠部材の状態観察

旧円覚寺仁王像の復元をめざすにあたって、本事業において復元制作を担当することとなった岡田は、沖縄県立博物館・美術館の収蔵庫に保管される仁王像の残欠部材の調査を行った。現存する旧円覚寺仁王像の残欠部材は全部で13部材あるが、それらの造形的特徴と現状の状態を目視観察にて調査した。その結果、13点の部材には、いくつかのグループに分類できる異なる造形的特徴が確認された。また、状態観察において、劣化損傷、布張りの有無、帯状の加工痕などが確認された。以下に調査結果の詳細を述べたい。

(1)造形的特徴の差異について

①No.001 (写真2-1)

No.001は、体幹部の正面左側の部分である。造形表現としては、胸筋部分をやや上方に引き上げ、腹から腰にかけての造形にも腰をやや上方へ上げたような特徴がみられる。そのため、No.001は本部材につながる左腕部を上方へ振り上げ、左腰をやや上方へひねりあげる姿勢を示すものであったと推測され、通形で左足を軸足として左腕を振り上げる姿勢をとる阿形像の体幹部左前面材であったと推定される。

体幹部の筋肉表現では極めて写実的な表現がなされ、形骸化しやすい肋骨の表現も自然である。衣文の表現はややおおぶりで形式的な様相もあるが、自然な布の動きが表現されている。表面に残る丸鑿を形状に沿って均一に走らせた鑿跡は、中世の中央仏師の彫法にままみられる特徴であり、制作年代や作者の技量の高さを伺うことができる。内側には深い内削りがなされ、幅広の鑿で勢いよく彫り込んだ様子が知れる。また、部材の矧ぎ面には長方形の柄穴が彫り込まれており、一部に差し込んだままの柄が現存している (写真2-2)。



写真2-1



写真2-2

状態としては、一部に朽損がみられるものの、木部の強度には問題がない状態である。

②No.002 (写真2-3, 2-4)

No.002は、全面に衣文が刻まれた裙部分の部材である。向かって右側に衣文を巻き込む表現がなされていることから、右側部分を後方にむけた腰部分の側面材であると推測される。現状の観察からは、阿形像の左側面部材であったと推定される。

造形的には衣文表現がやや固く形式的であり、各衣文襷の彫り込みも単調な表現がみられる。先のNo.001と比較すると明らかに造形的な違いがみられ、それは内削り面の彫り込み方にも差がみられる。状態もまた、No.001と比較すると朽損が少なく、使用されている木材も異なるように見受けられる。



写真2-3



写真2-4

③No.003 (写真2-5)

No.003は、体幹部の一部である。正面から見て向かって左側に肋骨表現と肩の矧ぎ面が、同側の下部に帯と天衣の結び目と思われる造形がみられることから、体幹部の背面右側の部材であったと推定される。

全体的に朽損、欠損などが著しいものの、造形的には写実性に富み、No.001と近似した特徴がみられる。また、矧ぎ面に長方形の柄穴がある点もNo.001と類似している (写真2-6)。



写真2-5



写真2-6

④No.004 (写真2-7, 2-8)

No.004は、全面に衣文が刻まれた裾部分の部材である。腰で折り返した裾を大きく翻し、巻き込んだ布を右方向へ流していく造形を示している。また、腰部分から垂れる裾を下方に向けてほぼ垂直に垂らす表現から、本部材は軸足側の裾部の右側面材であったと推測される。

その造形はやや形式的で、No.002の造形と近似している。内割り面の様相や表面劣化、木材の風合いにもNo.002との類似がみられるため、No.002と同時期に制作された部材であると推測される。



写真2-7



写真2-8

⑤No.005 (写真2-9, 2-10)

No.005は、全面に衣文が刻まれた裾部分の部材である。上部に天衣の結び目を表現し、衣文を織り込むように大きく巻き上げ、下部では裾をまくし上げるような表現がなされている。天衣の結び目があることから、裾部の左側面部材であったと推測される。

その造形はやや形式的で、No.002の造形と近似している。内割り面の様相や表面劣化、木材の風合いにもNo.002との類似がみられるため、No.002と同時期に制作された部材であると推測される。



写真2-9



写真2-10

⑥No.006 (写真2-11, 2-12)

No.006は、裾の最端を翻した裾裾部分である。右側に翻る形状であるため、卍形像の裾裾部材であると推測される。

二材を左右に鋸で接合する本部材は、造形的にはやや固い表現がみられ、衣文の膨らみ方も形式的である。保存状態も良好で、No.002と木材の状況も似ている。



写真2-11



写真2-12

⑦No.007 (写真2-13)

No.007は、左腕部材である。肩の矧ぎ目に蟻柄を設け、肘で強く屈臂する姿勢を取る。通例の仁王像の姿勢から推測すると、No.007は吽形像の左腕部材であると推定される。

肩と上腕部、前腕部の2材で構成される本腕材は、造形的には写実的な表現がみられるが、筋肉や血管の表現などにはやや固さがみられる。

No.7の手首部分の蟻柄にNo.11との接合を試みたところ、蟻柄の形状が一致したため、No.7とNo.11は連続する部材として接合されていたものと推定される(写真2-14)。



写真2-13



写真2-14

⑧No.008 (写真2-15, 2-16)

No.008は左腕部材で、屈臂して前腕を上方に振り上げる姿勢を取ることから、阿形像の左腕部材であったと推定される。

現状の部材は、前腕部、上腕部、体幹部との肩付け根部の3つの部材によって構成され、各部材は鋸や釘で接合されている。3つの部材で構成され

たNo.008を観察した結果、肩付け根部と上腕部の2部材には共通した造形がみられるが、現状では鋸で接合された前腕部は先の2部材と造形的に異なることが確認された。また、前腕部はNo.001やNo.003、または後述のNo.009と近似した写実的な造形的な特徴が見受けられるが、上腕部と肩付け根部は造形的にやや固く拙い特徴がみられた。特に上腕部の力こぶの表現や肩のくびれを深く刻み込む造形表現には、No.007やNo.009の腕部材とは明らかに異なる特徴が確認された。また、部材の劣化具合も同様に異なるため、No.008のうちの上腕部と肩付け根部は、後世の修理部材であると推測される。



写真2-15



写真2-16

⑨No.009 (写真2-17, 2-18)

No.009は、斜め下方にまっすぐに伸ばした右腕部材である。通例の仁王像の姿勢から見ると、阿形

像の右腕部材であると推定される。

その造形表現は極めて写実的で、筋肉のねじれ、血管の隆起などを巧みに表現している。その造形的な特徴はNo.001やNo.003、または先述のNo.008の前腕部と類似している。また、肩の矧ぎ面には、No.001やNo.003にもみられる長方形の柄穴が開けられている。



写真2-17



写真2-18

⑩No.010 (写真2-19、2-20)

No.010は、五指を広げた右手先部材である。腕材との矧ぎ面となる手首部分には、蟻柄の凹面が設けられているが、その形状が阿形像の右腕と推定されるNo.009の部材の手先の矧ぎ面の形状とは合わないため、本部材は吽形像の右手先部材であったと推定される。

五指を広げ、指を反り返せた仁王像特有の緊張感のある姿勢を示すものの、No.008の前腕部やNo.009の腕部材と比較すると、その造形にはやや形式的で拙い表現が感じられる。そのため、本部材は後世の修理による後補材であると推測される。



写真2-19



写真2-20

⑪No.011 (写真2-21、2-22)

No.011は、拳を強く握りしめた左手先部材である。腕材との矧ぎ面となる手首部分には蟻柄の凹面が設けられており、前述した通りNo.007の腕部材と接合部が一致したため、本部材は吽形像の左手先部材であったと推定される。

造形的特徴としては、接合面が一致したNo.007と近似しており、No.007と同時期に制作されたものと推測される。ただし、No.007は、他の腕部材であるNo.008（前腕部）やNo.009とは筋肉表現がやや異なるため、制作年代を特定するためにはより詳細な調査が必要であろう。



写真2-21



写真2-22

⑫No.012・No.013 (写真2-23、2-24)

脚部のNo.012と左足先部のNo.013は、No.012から突出する四角い柄がNo.013の上面に開けられた柄穴にぴったりと接合されることから、左足を構成する一具の部材であると考えられる（写真2-25）。組み合わせるとやや左側から右側に踏み出したような傾斜角度をとることから、通例の仁王像の姿勢から見ると吽形像の遊脚部材であると推測さ

れる。

No.013の造形は、甲の部分が肥大したように膨らみ、指を曲げた第一関節がこぶ状に大きく盛り上がる形状を示し、五指を曲げて力を込めた造形が特徴的であるが、その造形性はNo.001やNo.003とは大きく異なり、その造形も稚拙であるため、後世の修理によって補われた部材であると考えられる。

No.013の足裏部分は、著しく朽損した状態となっている（写真2-26）。そのことから、立地的に湿気が強い旧円覚寺総門に長年安置されていた仁王像が、その湿気の影響を多分に受けていたものと推測される。そのため、特に地面に近い脚部などは湿気の影響を強く受け、現存しない3本の脚部もまた朽損が著しく進んでいたものと推測される。



写真2-23



写真2-24



写真2-25



写真2-26

(2) 布張りの有無について

残欠資料の多くの部材の表面には布張りの痕跡が確認された。布張りが確認できる部材は、No.001（写真2-27）、No.002（写真2-28）、No.003、No.004、No.007（写真2-29）、No.008の前腕部、No.009、No.011、No.012（写真2-30）、No.013である。

布張りは木部に直接施され、後世に補われたと推測される最表層の彩色層の下層と、その下にある彩色層の下層に布張りがあることから、布張りは制作当初の仕様か、もしくは修理時に施されたものである可能性が高いと推測される。布張りの有無は残欠

資料の制作年代を判断するうえでの一材料となると考えられるが、布張りがある部材のうち、No.001やNo.003などの体幹部材やNo.009などの腕部材と、裾部材であるNo.002やNo.004、脚部材であるNo.12とNo.13とは、造形的な差異が確認されていることから、布張りの有無をもって同時代の制作であると判断することは性急であろう。



写真2-27



写真2-28

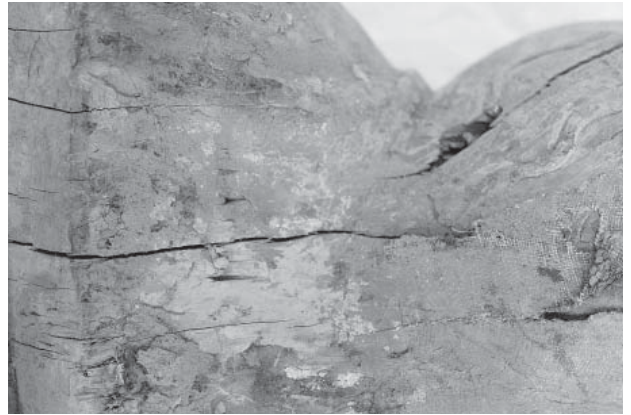


写真2-29



写真2-30

(3)使用木材の樹種の差異について

通常仏像一体を仕上げる場合、一種類の木材を使用して造像される場合が多い。しかし、特殊な信仰背景がある場合や、材料の入手が容易ではない地域や近世の地方仏師の工房による制作の場合などでは、複数の樹種の木材を使用して一体の仏像を造像する事例もある。

残欠部材の目視観察の結果、部材によって年輪の幅や木目の様子が異なることが確認されたため、現存する13個の残欠部材には複数の樹種の木材が使用されていると推測される。ただし、劣化損傷が進む木材を目視だけで樹種の特定を行うことは困難であるため、各残欠部材から自然脱落した木片や形状に影響を与えない箇所から微量の木片を採取し、細胞組織の顕微鏡観察による樹種同定調査を実践することとした。

(4)帯状の加工痕について

体幹部材であるNo.001の腹部の帯部分（写真2

－31) やNo.003の腋部分、または裾を表現したNo.005 (写真2-32) には、帯状で幅1cmほどの加工痕が横方向に施されている。No.001の加工痕のへこみの中に金属製の残欠部品が確認できるため、金属製のバンドのような帯状のものを体幹部にとりまわしていたと推定される。その使用方法を推測すると、総門安置時に壁面などと金属製のバンドで固定されていたものと思われ、台風の多い沖縄において暴風による転倒防止のために施されたのではないかと推測される。



写真2-31



写真2-32

(5) 造形的な差異について

沖縄県立博物館・美術館に保管される旧円覚寺仁王像の残欠部材13点の詳細な目視観察を行ったが、その造形的な特徴には差異がみられ、その造形的な特徴ごとに部材を分別すると、少なくとも2種類に大別することができる。

まず写実的で卓越した造形が確認された部材としては、No.001、No.003、No.008の前腕部、No.009に共通した特徴がみられた。

次に、写実的な表現ではあるが先のNo.001などとはやや異なる造形がみられたものは、No.007、No.010、No.011である。一見すると筋肉表現などの造形には似通った点があるものの、決定的に異なる点は血管の表現である。血管表現は、体幹部材のNo.001やNo.003には表現されておらず、腕材のNo.008の前腕部とNo.009、同じ腕材であるNo.007、No.010、No.011に表現されている。それらの血管表現を比較してみると、No.008の前腕部 (写真2-33) とNo.009 (写真2-34) に見られる血管表現は、血管を丸く彫刻し、輪郭部分を皮膚の内側から隆起するようになだらかに表現している。その表現は人体解剖学的に見ても写実的な表現であるといえる。それに対してNo.007 (写真2-35)、No.010とNo.11 (写真2-36) は、血管を四角く彫刻し、輪郭部分には切り込みの痕跡が確認されるなど、明らかに固い表現となっている。



写真2-33



写真2-34



写真2-35



写真2-36

そのような造形の差異が認められたことにより、No.001、No.003、No.008（前腕部）、No.009の4部材と、No.007、No.010、No.011の3部材は、異なる時代、または異なる仏師によって制作された可能性が高いと考えられる。

また、No.002、No.004、No.005、No.006、No.008の上腕部と肩付け根部、No.012、No.013も、先のNo.001のグループとは造形が異なり、それらと比較すると形式的でやや拙い造形が確認された。彫法もまたNo.001などとは異なり、刃物が形状に則さない不規則な方向から入れられていることから、作者の技量の差か、もしくは何かを模しながら彫刻を進めていた可能性が感じられる。そのため、No.002、No.004、No.005、No.006、No.008の上腕部と肩付け根部、No.012、No.013は、仁王像が制作された当時から年代を隔てた時の修理によって付け加えられた後補部材であると考えられる。

以上が旧円覚寺仁王像の残欠部材の目視調査によって得られた見解である。目視調査により、各残

欠部材の造形的な差異が確認でき、制作年代や制作者が異なる可能性があることが示唆されたものの、目視観察だけで使用木材の樹種や制作された正確な年代を確定することは困難である。

沖縄戦による甚大な被害を受けたことによって残欠部材となった旧円覚寺仁王像であるが、仁王像が安置されていた同所に復元された総門は窪地にあり、総門の周辺に池があることで湿気がたまりやすい環境にあるため、近年復元された総門には復元されてから50年余りしかたっていないのにも関わらず藻やカビが発生している。高温多湿な環境である沖縄において、このような立地条件下に安置された木製の仁王像は、朽損が著しく進んだであろうことが予測される。また、門の正面を格子だけで開け放つ構造を持つ総門と仁王像は、毎年発生する台風による被害も受けたことであろう。王家の菩提寺である円覚寺の正面玄関である総門に安置される仁王像に、朽損や台風などによる被害が進んだ場合、王の権威を保つうえでもそのまま放置するとは考えにくく、その都度修理がなされたことであろう。

第5章では、目視観察によって得られた見解を基に実践した各残欠部材の使用木材の樹種同定調査や放射性炭素年代測定調査の結果とその考察について述べてい。

3. 円覚寺の歴史と総門仁王像

円覚寺は『球陽』に、弘治9（1492）年に竣工し弘治7（1494）年に完成したとある。尚王家の菩提寺として筆頭格の寺院で、天王寺・天界寺とともに王府の三大寺であった。臨済宗妙心寺派で山号は天徳山。寺域は首里城北側に隣接している。西側（前面）に円鑑池と弁財天堂（当初は経堂と呼ばれた）があった。創建当時、荒神堂・寝室・方丈・仏殿・法堂・三門・両廊および僧房、厨庫・浴室等があった（『琉球国由来記』肇創天徳山円覚禅寺記・『球陽』尚真王16年条）。総門も同時期には建造されていたと思われる。建物は円柱入母屋造で三間二面の八脚門であった。中央に両開き棧唐戸を設け、左右に仁王像が配置できる空間がある（図3-1）。円覚寺創建前後に仁王像に関する記述は無く記録の面で仁王像の制作年代は不明である。円覚寺の開基が京都南禅寺の僧芥隠承琥であり、寺院建設の工人や仏像等の

制作の手配に芥隠を含めた京都五山の僧侶のネットワークが活かされていたことは充分推察することができ、円覚寺は王府の菩提寺として禅宗寺院の格式を持って整備されたと思われ、創建前後に総門に仁王像も製作され安置したものとする。今回の琉球王国文化遺産集積・再興事業に伴う仁王像残欠の材質調査や作例調査からも仁王像の制作は円覚寺創建前後で京都の院派の仏師集団が制作した可能性が指摘できるようである³⁻¹。

総門南側の左掖門は千鳥破風の石造屋根、総門北側の右掖門は唐破風の石造屋根であった。総門から放生池と放生橋・三門・仏殿・竜淵殿を一直線上に配置し後方にいくほど地勢が高くなっている。放生橋は橋の親柱及び『球陽』尚真王22年（1498）条に弘治11年長史梁能・通事陳義が督造したとある。石造勾欄柱の蓮座上に子連れ獅子、羽目板には雲鶴・亀・牡丹・蓮華などの精巧な彫刻が施されている。橋を渡り石段を登ると三門があり、二層の入母屋造で円柱三間二面、両脇に切妻屋根の門廊を構えている。『球陽』尚貞28年（1696）条によると、観音と十六羅漢を安置した。その奥の仏殿は二層の入母屋造で円柱五間五面の建物で円覚寺の中心的な建築物である。天井には幾重にも組み合わされた枅組があり、白・黒・朱で彩色し、須弥壇壁画の配色に対応していたようだ。仏殿中央の須弥壇は木彫装飾のある欄干があり、木像の釈迦・文殊・普賢の三尊像を安置し、中尊の前には三面三方牌が安置されていた。背後の壁には尚貞29（1697）年に金剛会図の彩色画が描かれ、その裏壁に東面して普菴禅師の彩色板軸が掛けられていた。仏殿奥の左隅に三宝大荒神と三州護法韋駄天の二像があり、右隅に大帝大権修利菩薩・掌簿判官・感應使者の三像が安置されていた。仏殿前と殿内に鐘が二口あり、前者が円覚寺殿前鐘、後者が円覚寺殿中鐘といった。いずれも弘治8（1495）年鑄造で、製作者は「大工大和氏相秀」とあり、山口県の鑄物師であったと考えられる。仏殿の裏には竜淵殿（方丈）がある。竜淵殿は円覚寺最大の建物で大殿とも称せられた。単層入母屋造角柱の九間六面で、屋根には鬼瓦を配していた。創建当時は木像の虚空蔵菩薩を安置していた。『球陽』尚敬王9（1721）年条によると竜淵殿は失火で焼失した。この時住僧覚翁は私物の搬出に専念し尚

清王の位牌、尚豊王・尚賢王の御後絵を焼失させた罪で八重山へ流刑となった。建物はただちに再建され同年大殿（龍淵殿）中央に仏像を安置し、左右に先王七世以下の位牌を安置した。また殿内には乾隆21（1756）年に来琉した周煌筆の扁額「莊嚴国土」があった。龍淵殿前面右には獅子窟・御照堂という建物があった。『球陽』尚真王18（1694）年年条に宗廟を大殿の右側に構えるとあり、歴代国王の位牌を安置する御照堂を創建した。『球陽』尚元王16（1571）年条に廟宇が狭隘なため国王の位牌を安置するのが難しくなったため宗廟を龍淵殿の右の地にさらに建設したとあり、古い御照堂の西側で南面し五間五面の単層切妻造の建物だった。『球陽』尚敬王9年条によると御照堂は上御照堂と下御照堂とやはり二棟あったことがみえる。上御照堂には尚円・尚真・尚清、下御照堂には尚元・尚永・尚寧の位牌があった。『球陽』尚敬王16（1728）年条によると改めて大殿を宗廟とし、上御照堂を改修して仏像を安置した。この建物を獅子窟という。仏殿の北側で南面し単層円柱入母屋造の建物であった。内部は白壁で床には氈を敷き、南面する奥壁一杯に壇を設けて仏像、開基の芥隠の像、歴代住持の位牌も安置されていた。獅子窟の西側に位置する下御照堂は小堂に改め法堂の僧を住まわせた。龍淵殿の南には軒を連結して庫裏があった。仏殿と三門の間の南寄りには鐘楼があった。当初鐘楼は放生池の南側にあったが地勢が低く、鐘の音が遠くまで聞こえないので亭寮・照堂寮を寺の南の空地へ移し、その跡地に鐘楼を移している（『球陽』尚敬王32年（1744）条）。この鐘楼は入母屋造の円柱で三間二面であった。鐘楼の鐘は円覚寺楼鐘といい、弘治9年（1496）に鑄造した（『球陽』尚真20年条）。順治年間に破損し、康熙34（1695）年、山城国で鐘を再鑄し同36年に再び掛けた（『琉球国由来記』）。『球陽』尚敬王21（1733）年条によると鐘楼の南には垣を隔てて行堂があった。行堂は使令や撞鐘の役をする者が住む建物であった。寺の内囲いの地盤より5～6mほど高くなっていた東側には荒神堂が立っていた。荒神堂の前に円覚寺禅寺記と国王頌徳碑の二石の碑文があった。

円覚寺は尚王家の菩提寺として正月の社参・御甲子御祈念・恵日御拝、四月の灌仏会、七月の七夕行

幸・施餓鬼等をはじめとして、多くの参詣と行事が行われた(『琉球国由来記』)。また咸豊11年(1861)に、尚泰王は大陸での太平天国の乱、アロー戦争等の動乱を憂慮し首里森御嶽、園比屋武御嶽、円覚寺、天王寺等を含めた数カ所で太平天国の乱の平定と異国人の退散を祈願している(『中山世譜』)。

19世紀中頃から琉球処分により王府が崩壊する時期に首里王府は、真和志町にあった中城御殿(次期国王の屋敷。現首里高校新校舎建設区域)を大中町(旧沖縄県立博物館跡)に移転させたり³⁻²、伊是名の銘苅家に清明祭等の祭祀道具を下賜し、伊是名玉御殿で首里の玉陵と同じ儀礼を行うように指示を出している³⁻³。この時期に王府関連施設の移転・改修を伴った再整備や、祭祀内容の再編を積極的に行っていたのである。

円覚寺は施設の増築や火災等の破損や修理を繰り返しながら歴史を歩んできた。総門の仁王像も残欠から過去の修理の痕跡が認められる。先述の19世紀に盛んに行われた王府関連施設の再整備に伴う修理だった可能性もあるのではないだろうか。

その後、円覚寺は明治12(1879)年の琉球処分後、明治17(1884)年に尚家の私寺となった。昭和8(1933)年に総門・左右掖門・三門・仏殿・龍淵殿・獅子窟・鐘楼・放生橋が国宝に指定されたが堂宇は沖縄戦でほとんど破壊・焼失した。

戦後、昭和32(1957)年に放生橋が修復され、昭和43(1968)年に総門、左右掖門が復元された。現在、三門の復元整備が計画されている。また円覚

寺総門は復元された建物で、三門以降の堂宇が存在しないにも関わらず園比屋武御嶽石門・弁財天堂とともに信仰の対象となっている。

4. 戦前に仁王像をみた古老たちの聞き取り調査

この事業が開始される前に、平成26年11月～27年3月の間、「残欠資料活用可能性調査」を行い、戦災文化遺産の修理復元を急務とされる状況の中で、古老たちの記憶における戦前の王国文化遺産、特に仁王像の状況についての聞き取り調査を行った⁴⁻¹。実際、旧円覚寺仁王像を見た方々は、すでにご高齢になっており、王国文化に関する見聞そのものが消滅する危機にある。当館が所蔵する残欠文化遺産の体系化を図る上でも、仁王像復元の可能性を検討する上でも、戦災によって破壊される前の仁王像の状況や仁王像の役割の見解や伝承等についての基本情報として把握する必要がある。

ここでは、実際に戦前仁王像をご覧になられた方々や円覚寺関係者等の証言を通して、戦前の仁王像の姿や人々の信仰物としての状況を記したい。対象とした方々は、男性が11人(1人重複)、女性が12人の合計23人であった。年齢は、最年長で大正10年生まれで94歳、最年少で72歳であった。平均は80代半ばである。聞き取り調査の場所は、協力者の各ご自宅、同窓会館及び当館で行った。この聞き取りを行うにあたって、被調査者が高齢であるため、対象者をある程度絞ることにした。そこで、旧円覚寺に最も近い学校に通学していた旧児童・生徒を中心に聞き取りの対象者にした。当時、同寺の斜向かいに沖縄県師範学校があり、同校には附属小学校が併設されていた。そこで、当時、沖縄県師範学校附属尋常小学校の児童や同校高等科の生徒、通学路として円覚寺前を日々通っていた首里第一尋常小学校の生徒等を対象にするのが早道だと考えた。彼ら、彼女たちは当時12歳から15歳頃であった。彼らにとって、円覚寺前の道が通学路であり、また最も身近な遊びだと思ったからである。その同窓会に当たったところ、ご協力をいただくことができた。実は、当時、首里城周辺には学校が多くあった。首里城内に第一尋常小学校(首里城下の御庭)や城外(龍潭畔)に第二尋常小学校、県立第一中学校、そして県立師範学校があった。ただ残念なことに、男

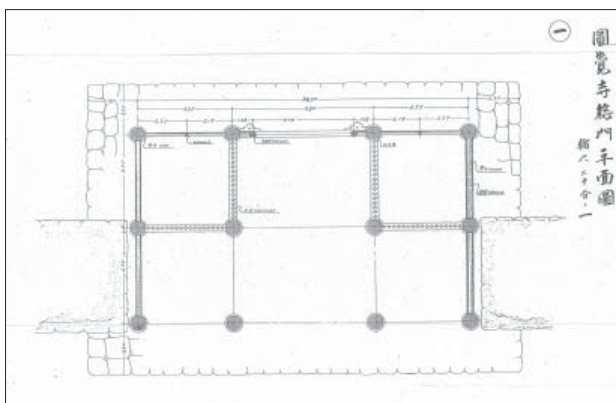


図3-1 森政三コレクション 円覚寺総門図面

戦前、森政三が沖縄調査で作成した図面と思われる。
戦災で消失する前の円覚寺総門の規模が把握できる。
沖縄美ら島財団所蔵

女とも生徒の大半は沖縄県立第一中学校または師範学校男子部、師範学校女子部、第一高等女学校に進学し、戦況の悪化により学徒動員され、「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり学徒」として、沖縄戦で夭折した者が多い。そのため、被調査者の数は自ずと限られてくる事情があった。

聞き取り調査の項目は、円覚寺にまつわるエピソードや日常、仁王像に関することに関しては、身長、姿勢、形相、衣裳、彩色、その他の項目で聞き取りした。限られた人員ではあり、また70年以上前の記憶を遡及する中で、忘却や記憶違いなどがあつたりする部分も否めないが、その最大公約的な内容や特記される事項について、聞き取り調査の概要を記すことにする。

4-1.円覚寺にまつわるエピソードやその日常

円覚寺に関しては、当時まで仁王像や寺そのものを拝する慣習があつたようである。人々にとって、最も親しみがもたれたのが総門に安置される仁王像であつた。大正14年うまれの女性の話では、総門の前で寺（仏殿）に向かって拝みする習わしがあつたという。年に2回、円覚寺参りのようなものがあつたという。12月の年中ウガミでは、「一年守ってありがとうございます」と拝し、年明けの2月のハチウガミ（初拝み）では、「一年の健康が守られますようお願いします。」と拝したという。この慣習が首里一帯に共通していたかについては、不明である。

大正10年生まれの女性は、仁王像に関わる琉歌を紹介してくれた。「円覚寺ウジョー（御門）ヌウニブトゥキ（鬼仏）ガナシー、ワンミーンジョークスラバ、ミーハイ、クチハーイウドウチタボリ」（円覚寺御門の鬼仏様（仁王様）、私の愛しい人を誘惑する人を睨んで怒鳴って脅してください。）この琉歌は、円覚寺の仁王像の眼力で、恋愛成就を祈願しており、睨みをきかせる仁王像の御利益の一端を知るうえで興味深い。昭和11年生まれの女性の証言では、子供の夜泣きを治してもらうお願いをする対象であることを大人たちが話していたという。育児を担う女性たちにとって、乳幼児の夜泣きは、子ども多くいる大家族にとって、安眠を妨害する深刻な問題であつた。それを治癒すると信じられたのが、仁王像の存在であつたことも興味深い。また、マカー

ブトゥキーには、子ども生まれると赤飯を炊いて、「チャーギ（イヌマキ）」の肌のようになるようにと願いをしていたという。人々の仁王信仰には、子どもの健やかな成長を祈願の対象仏になっていたことがわかる。

仁王像は円覚寺総門に立つ像であることは、次のような証言で確認することができる。「仁王像は一对で総門に立っていた。」、門に向かって右側を人々は、「ニオーブトゥキ（仁王仏）、左側をマカーブトゥキ（マカー仏）」と呼んでおり、前者を男、後者を女（マカー）と認識していた。また、口の開閉の有無で両者が認識された。口を開けている方がニオーブトゥキで、口を閉ざしている方がマカーブトゥキである。

王国時代、首里王府の庇護にあつた公的機関としての円覚寺は、置県後、尚家の私寺になる。そのためそこの住職は尚家自身が雇用することになった。当館には、戦前最後の住職を勤めた能山宗興氏の円覚寺住職補任の辞令書（8枚）及び通知書（4枚）が所蔵される。全部で12枚あり、辞令書は、昭和10年～18年のもので、円覚寺御照堂役、同勤続、円覚寺住職事務取扱、円覚寺住職、崇元寺住職兼務、同勤続などの内容のものがあつて、発令者は、尚家家扶の護得久朝章や佐久間正文となつている。また、4件の通知文は、尚家庶務係名で記されている。

戦前最後の円覚寺住職であつた能山宗興の娘（貞子）や息子（宗忠）の話によると、仁王像がたつ総門は、通常は閉ざされていたが、正月三が日は開けられたという。朝6時と夕方6時の一日二回、楼鐘（現在当館が所蔵する旧円覚寺楼鐘）を鳴らされたという。それを鳴らす担当の老夫婦（大嶺）がおり、鐘楼の側に住んでいた。そのお爺さんは中城御殿に勤めており、お婆さんが鐘撞き係を行っていたという。彼らも尚家に雇用されたのである。その鐘の音は、北谷あたりまで聞こえたというから、2トン近くも重量がある県内最大の梵鐘音の低重音の響きは、城下町首里の風物詩のひとつであつた。

円覚寺の一番奥には、龍淵殿があり、尚家の歴代国王の位牌が祀られていた。脇門の外側には、お菓子やカーブチー（みかんの一種）をバーキ（籠）に入れた露天がたつていたという。彼らのことを「ウインムンサー」（売る人）と呼んでいた。ウガミサー

(拌みをおこなう人) たちは多かったようだが、その人たちがいなくなる時間帯は、静かで気味悪いという人もいた。賽銭の小銭をつくるために、住職のところに両替にくる人もいたという。子どもたちへの躰の一環で、円覚寺のある場所が使われた。悪いことをした人は、放生池に引っ張られという。その池のことを方言で、「ワジリガー」と呼ばれた。

4-2.仁王像に関すること

聞き取り調査で、各人から聞いた内容を列挙する。

(1)姿勢

- ・手のあげ方が阿吽形で違う。
- ・手は広げて、バナナの大きさの指であった。
- ・胸板が厚く逞しい。
- ・体が大きく、筋肉隆々。
- ・足の甲がむっくりして、フィラリア（象皮病）の足みたいで、裸足だった。
- ・仁王像の体の向きはまっすぐではなく、わずかに総門を通る人の向かって若干内向きになっていた。
- ・口が開いている方（阿形）が何かもっていた。左の手は開いていた。
- ・静止している感じではなく、今にも動き出しそうな襲いかかってきそうな感じだった。
- ・腕をあげて、怒っている感じ。
- ・踏ん張っている感じ。ニオーは右手に杖のような鉄の棒をもっていた。
- ・マカーは持っていなかった。

(2)衣裳

- ・ブルー系のマフラーみたいなものを肩を両袖に身にまとっていた。
- ・胸周りから下に衣があった気がする。
- ・腰巻をつけている。上半身は裸。
- ・太ももはでている。
- ・裸足。
- ・体にまとわりつくようにスカーフみたいなものがあった
- ・布ぎれのような首から垂れているようなイメージであった。
- ・首にタオルのようなものを巻き付けていた。

(3)身長

- ・6尺（180cm）は越えていた。
- ・格子より身長が高かった（180cm以上）
- ・大きさは2 m50cmはあったかな。
- ・自身の身長(173cm)より大きかった印象。
- ・総門の梁よりは低い。中の空間にめい一杯に作られているような感じ。
- ・台に乗っていたと思う。
- ・子どもの頃で、自分の頭が仁王像の腰くらいにくるぐらいの大きさ。
- ・大変大きかった。2 mぐらい。
- ・子どもの身長の3倍ぐらいあった（2 m）
- ・顔をみるのに見上げてみた。

(4)形相

- ・優しい顔じゃない。普通の子どもがみたら泣くだろう。
- ・目が光っていた。ギラギラと。
- ・口が開いている方（阿形）が怖かった。鬼みたい。髪はあった。
- ・牙がでていたから怖かった。目は正面を向いて怖かった。
- ・ギョロ目の目ん玉に威圧された。眉がせりあがっていた。
- ・目線は見上げた時に目が合うようにできている。ちょっと下目になっており、睨んでいる。
- ・眉は彫が深く迫力がある。威圧感がある顔。
- ・顔が大きく、頬が盛り上がっていた。目が怖い。
- ・目をむき出して、口を「イー」とあけている。
- ・ニオーは、鬼に似たような角張った顔で、角がないだけ。
- ・マカーは少しうつむき加減。ニオーに比べると優しい顔。口は開いていなかった。顔の大きさはニオーと一緒に。
- ・両方とも目が大きくギョロとしている。
- ・目が鋭くて怖かった。
- ・顔がまるっこい。目は石膏像のような西洋人の目ではなくて、腫れぼったいアジア人の目をしていた。
- ・牛眼のよう。闘牛での牛の目のような感じ、血走っている。甲状腺機能亢進症（バセドウ病）や眼球肥大症のような目。眼球が思いのほか大きくて睨

んでいる感じ。目玉がギョロとして怖い印象。

- ・四角い顔。縦長でも横長でもない。ちょっと角がある。恰幅のある顔。

(5)彩色

- ・青色が残っていた。
- ・灰色みたいになって、塗料もはげていた印象。顔も色がはげていた。
- ・真っ黒ではない。すすみみたいな、灰色みみたいな色
- ・色は煤けたカーキ色のような色。
- ・殆ど剥げて、古びた木の色になっている。
- ・ねずみ色っぽい体だった。木が朽ちたような色。
- ・灰色がかっていた。すすみみたいな感じ。
- ・木の古くなったような色。
- ・色はグレー、体全体がグレー。セメントみたいなグレー。
- ・古びた木の色。
- ・ねずみ色のガサガサしたもの。
- ・完全に色なしではなく、少しは着いていたと思う。

4-3.聞き取り調査のまとめ

今回の聞き取り調査では、沖縄県師範学校附属尋常小学校や同校高等科の児童生徒を中心に23人の古老たちから話を聞いた。被調査者のみなさんが70年前の記憶の定着性に痛く感じ入った。同時に如何に円覚寺仁王像の存在の大きさやインパクトがあったかを知ることができた。聞き取りの中で、仁王像をみる男女の性差も若干感じた。男生徒は、全般的に肝試し的要素も含めて、仁王像の顔をはじめ全体をしっかりと観察している感じがした。一方、女生徒は顔の形相が怖い顔のため顔を直視するのが苦手であった印象を受けた。

最大公約的なイメージをまとめると、次のようになる。体長は、約2 m程度。羽衣のようなものをまとっていた。体形は、直立か、少しひねって見え、石のような台に立っており、総門の入り口の左右の格子の中に正面に向かった立像であった。「二オーブトゥキ」と呼ばれる阿形が総門の右側に立ち、「マカーブトゥキ」と呼ばれる吽形が左側に立っていた。両像とも格子状のスペースいっぱいであった。

顔の形相は口の開いた二オーブトゥキが男で、口を閉じたマカーブトゥキが女と認識され、マカーの

方がやさしい顔立ちであった。顔の形は、どちらも角張った顔立ちであった。顔のパーツで、最も特徴があるのが目である。殆どの話者が目の特徴を話していた。血走ってみえる、飛び出したようなギョロ目、威圧感のある怖い形相であったことが伺える。また、マカーブトゥキは左手に棒のようなものをもっていたことから、金剛杵をもっていたことがわかる。上半身が裸で、腰から下に衣があった。風化や劣化により、彩色が剥げ、木地の色が露出し、全体的に灰色の色調であったことが分かった。

5. 仁王像残欠部材の材質調査と年代測定の知見

旧円覚寺仁王像の残欠部材は、状態観察調査において少なくとも2つの異なる時代（制作当初部材と後世の修理部材）に制作された可能性があることが推察された。その結果を受け、当該部材の樹種同定調査を東北大学学術資源研究センター植物園の大山幹成氏に、放射性炭素年代測定による年代測定調査を山形大学高感度加速器質量分析センターの門叶冬樹氏と株式会社パレオラボに依頼し、旧円覚寺仁王像の使用木材と制作年代を自然科学的に調査することとした。以下にその結果を報告したい。

5-1.樹種同定調査結果報告

沖縄県立博物館の収蔵庫において旧円覚寺仁王像の残欠資料から岡田によって採取された微量な木片試料を用い、使用用材調査のために木材解剖学的特徴に基づいて樹種同定を行った結果を報告する。

本体から採取した微量木片を対し、カミソリを用いて3断面（木口面、柃目面、板目面）の徒手切片を採取した。これらの切片をガムクロラルで封入して永久プレパラート標本を作製し、現生の標準試料を参考としながら光学顕微鏡で観察を行った。合計16点の試料を調査対象とした。

同定の結果、2分類群が認められたので以下に解剖学的特徴を記載する。同定結果は、下表にまとめた（表5-1）。なお、今回の同定結果は、前述した2-2.旧円覚寺仁王像の残欠部材の状態観察や3.円覚寺の歴史と総門仁王像での考察を受けて、日本産樹種であるという前提で示している。カヤ属、マキ属は中国にも分布しているが、参考資料が十分でないため、属レベルでの同定に問題はないものの、

中国産まで含めた種レベルでの同定は現時点では不可能である⁵⁻¹。

カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc.

イチイ科 (写真5-1 ~ 5-3)

仮道管、放射組織からなる針葉樹材で、樹脂細胞、樹脂道を欠く。仮道管内壁に2-3本まとまったらせん肥厚が認められる。分野壁孔はトウヒ型で1分野に1-4個存在する。カヤは、宮城県を北限として、屋久島まで分布し、関東以南の暖温帯域が分布の中心であるとされている⁵⁻²。材は、狂いが少なく、切削が容易である。保存性は高く、水湿にもよく耐え

る。桶材、漆器木地、家具材、彫刻材、船材、将棋盤など多様な用途に用いられる。

マキ属 *Podocarpus* マキ科 (写真5-4 ~ 5-6)

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹材で、樹脂道を欠く。早材から晩材への移行は緩やかで、年輪内に樹脂細胞が均一に散在する。らせん肥厚、放射仮道管は認められない。分野壁孔はトウヒ型で1分野に1-2個存在する。以上の形質からマキ属の材と同定した。沖縄に分布するマキ属には、イヌマキ、ナギ、リュウキュウイヌマキがあるが、材構造からは種の同定は困難である。このうち、最も普通

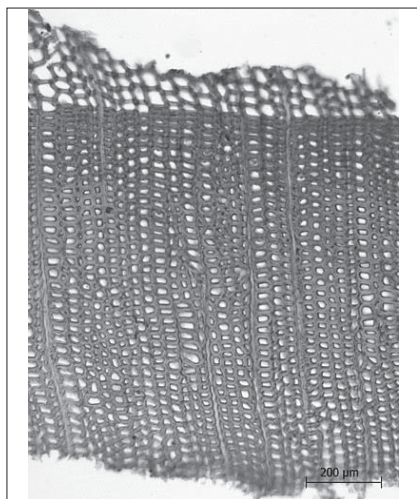


写真5-1 カヤ横断面
(No. 008前腕部)

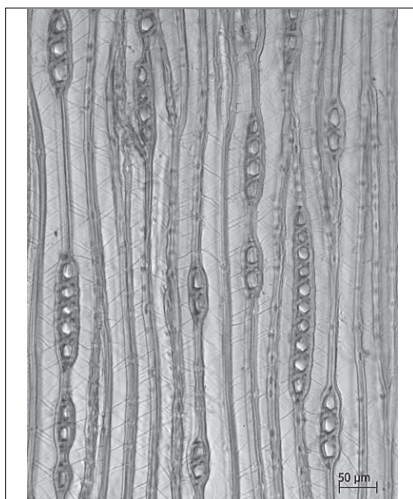


写真5-2 カヤ接線断面
(No. 008前腕部)



写真5-3 カヤ放射断面
(No. 008前腕部)

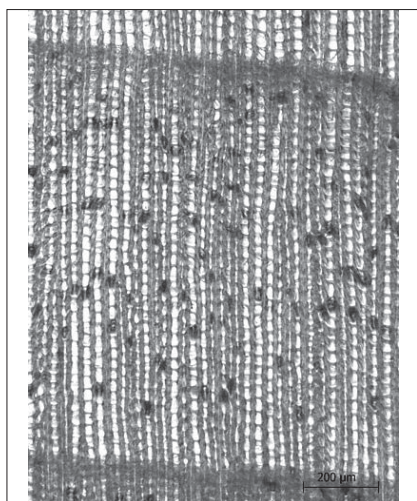


写真5-4 マキ属 横断面
(No. 013)

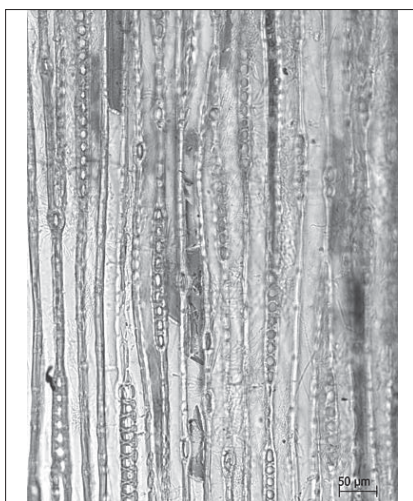


写真5-5 マキ属 接線断面
(No. 013)

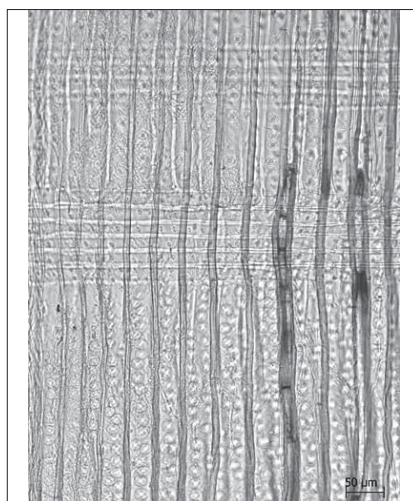


写真5-6 マキ属 放射断面
(No. 013)

に分布しているイヌマキの材は、切削などの加工性
は中庸、割裂性が高いという特徴がある。また材の
保存性が高く、水湿に耐え、シロアリに強い
ため、沖縄では柱、梁、土台など主要建築構造材に用いられる。そのほか、指物、漆器
木地、土木材、棺材などにも用いられる。

試料番号	樹種名
No.001	カヤ
No.002	マキ属
No.003	カヤ
No.004	マキ属
No.005	マキ属
No.006	マキ属
No.007（上腕部）	マキ属
No.007（前腕部）	マキ属
No.008（上腕部）	マキ属
No.008（前腕部）	カヤ
No.008（肩付け根部）	マキ属
No.009	カヤ
No.010	マキ属
No.011	マキ属
No.012	マキ属
No.013	マキ属

表5－1 樹種同定結果

5-2.放射性炭素年代測定報告

樹種同定調査の結果をもとに、カヤ材と同定されたNo.001、No.003、No.008（前腕材）、No.009の4部材と、マキ属材と同定されたNo.002、No.007、No.012の3部材を対象に、測定に必要な最低限の木片を採取して、山形大学高感度加速器質量分析センターのAMSチームと株式会社パレオラボによる放射性炭素年代測定を実践した。以下に

測定結果を報告したい。

山形大学高感度加速器質量分析センターでは、円覚寺仁王像試料6点に対して、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

試料情報の前処理方法は、まずアセトンによる5分(1回)、クロロホルム＋メタノール(1:1)30分(2回)、アセトン5分(2回)の工程で超音波洗浄を実施し、続いてAAA処理1M HCl 80度1時間、0.1% NaOH 80度1時間(2回)、1M HCl 80度1時間の処理を行った。測定試料は、山形大学総合研究所4階の試料作製室にて前処理作業を行った。その後、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラフアイト調整システムにて、サンプルのグラフアイト化を行った。

前処理が完了した資料を、総合研究所1階に設置した加速器質量分析計(YU-AMS:NEC製 1.5SDH)を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した(図5－1～5－6)。

サンプルの放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果を示す。同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。各サンプルの暦年較正結果については、表5－2に記載した。

部材番号	測定番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
						1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
No.001	YU-4303	EKZ-UE_No1	-24.37 $\pm$ 0.31	429 $\pm$ 20	430 $\pm$ 20	1439AD (68.2%) 1458AD	1431AD (95.4%) 1480AD
No.008(前腕)	YU-4305	EKZ-ZW_No8	-24.60 $\pm$ 0.25	641 $\pm$ 20	640 $\pm$ 20	1294AD (25.0%) 1310AD 1360AD (43.2%) 1387AD	1287AD (39.1%) 1321AD 1349AD (56.3%) 1392AD
No.009	YU-4306	EKZ-ZW_No9	-22.72 $\pm$ 0.28	647 $\pm$ 20	645 $\pm$ 20	1292AD (26.0%) 1308AD 1362AD (42.2%) 1386AD	1285AD (40.8%) 1320AD 1351AD (54.6%) 1391AD
No.002	YU-4033	OKNW-EKZ-2	-24.98 $\pm$ 0.19	108 $\pm$ 20	110 $\pm$ 20	1694AD (12.6%) 1712AD 1717AD (6.9%) 1726AD 1814AD (24.0%) 1853AD 1858AD (2.3%) 1862AD 1867AD (16.7%) 1891AD 1909AD (5.6%) 1917AD	1686AD (27.2%) 1732AD 1808AD (55.6%) 1897AD 1902AD (12.6%) 1928AD
No.007(上腕)	YU-4304	EKZ-ZW_No7	-19.44 $\pm$ 0.32	96 $\pm$ 20	95 $\pm$ 20	1697AD (24.4%) 1726AD 1815AD (17.4%) 1836AD 1877AD (14.9%) 1895AD 1903AD (11.4%) 1917AD	1691AD (26.5%) 1729AD 1810AD (68.9%) 1923AD
No.012	YU-4307	EKZ-HA_No12	-23.27 $\pm$ 0.27	171 $\pm$ 20	170 $\pm$ 20	1669AD (12.3%) 1682AD 1736AD (41.5%) 1781AD 1799AD (5.7%) 1805AD 1935AD (8.7%) 1945AD	1665AD (17.5%) 1692AD 1727AD (47.3%) 1785AD 1793AD (10.3%) 1812AD 1920AD (20.2%) ...

表5-2 暦年較正結果

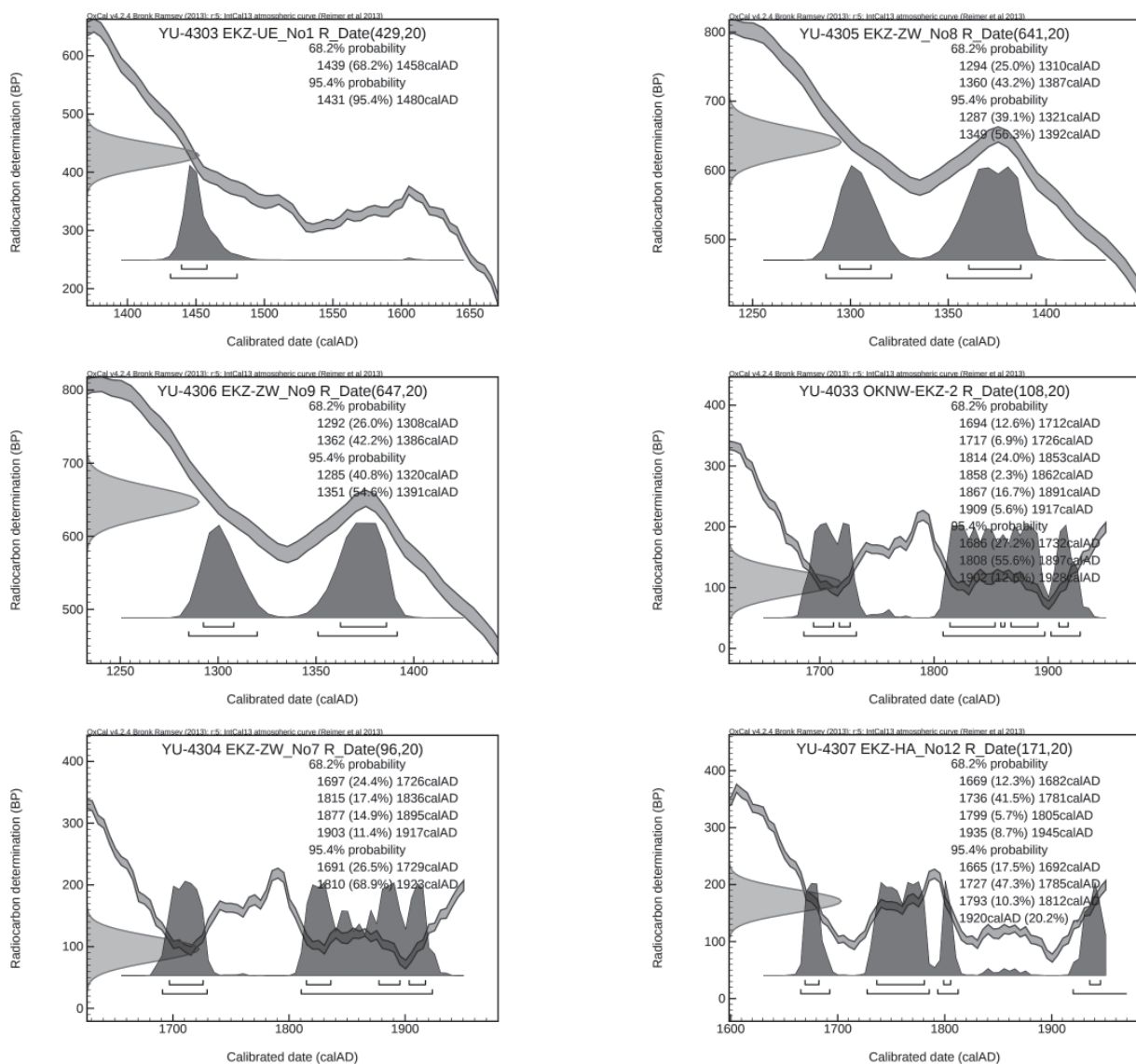


図5-1 ～ 5-6

一方で、株式会社パレオラボに委託したNo.003の部材から採集した木片からは、放射性炭素年代測定法の結果、1426～1459年（95.4%）の暦年較正値を得た。

5-3.放射性炭素年代測定結果を踏まえた木材の伐採年代の考察

樹種同定および放射性炭素年代測定の結果を受け、岡田による旧円覚寺残欠部材の使用木材の伐採年代に関する考察をおこなった。

放射性炭素年代測定によって得られた測定値は、あくまで測定対象とした木片が生育していた年代を示唆するものであり、測定値から制作年代を推定す

るためには、彫刻する際に除去される木材の辺材部分の年輪数を加算する必要がある。測定箇所から辺材までの年数は樹種や部材の状況によってそれぞれ異なるが、平均的に50年ほどの年輪数が存在すると考えられる。

今回放射性炭素年代測定調査を実践した部材のうち、No.1、No.3、No.8（前腕部）、No.9の部材の測定値がほぼ同時代の年代数値となり、No.2、No.7（上腕部）、No.12の部材の測定値がほぼ同時代の年代数値となったため、それぞれは同じ時代に制作されたものと推定される。また、樹種同定の結果においては、No.1、No.3、No.8（前腕部）、No.9はカヤ材であり、No.2、No.7（上腕部）、

No.12はマキ属材であるという結果が得られている。

(1)カヤ材の伐採年代考察

カヤ材が用いられているNo.001、No.003、No.008（前腕部）、No.009のうち、No.001、No.003から得られた暦年較正值はほぼ同時代の結果となっている。No.001とNo.003は、それぞれ木芯を取り除いた部位を使用しており、No.001の接線面の最大長は20cm、No.003の接線面の最大長は18.5cmである。No.008（前腕材）も木芯を含まない部材であるが、部材の幅が15cmとやや小さな部材を使用している。一方、No.009は木芯を含む部位を使用しており、部材の最大幅は13.6cmである。そのため、4つのカヤ材部材のうち、まずは最も木材幅のあるNo.001の部材を基準として年代の考察をしてみたい。

木芯を含まないNo.001の年輪を木口面から確認すると、年輪の内側箇所年輪曲線が比較的緩やかであり、その年輪曲線から推定した木芯位置から部材の内側までの距離と部材の接線面の20cmの幅を加算すると約40cmとなる。この数値を単純に倍にするとNo.001を切り出した原木の幹の直径は心材だけでも80cmとなり、取り除かれたであろう辺材部分の幅を足すと直径1mほどの木材であったと想定される。

No.001の最外年輪部は、切り出した原木の辺材部分にかなり近い位置で木取りしたものと推測される。辺材の年数に関しては取り除かれているために確かな年輪数は知りえないが、心材だけで約80cmの木材で、なおかつ比較的年輪幅が狭い本材の場合、辺材年数は50年ほどであると推定される。

今回の測定によって得られたNo.001の放射性炭素年代測定の暦年較正值は1431年～1480年（95.4%）である。その数値に推定される辺材年数である50年を加算すると1481年～1530年となり、この年代がNo.001の推定伐採年代となる。

No.003の放射性炭素年代測定の暦年較正值は1426年～1459年（95.4%）であり、No.001とほぼ同年代の結果が得られた。そのため、No.001とNo.003は同時代に伐採された木材を使用していると推定され、推定伐採年代もNo.001と同様の50年

を加算した1476年～1509年が推定伐採年代となる。

同じくカヤ材が用いられているNo.008、No.009の測定値は、No.001、No.003よりも古い暦年較正值が得られたが、No.008、No.009の部材はいずれも木芯を含むか木芯からほど近い部材であるため、No.001、No.003よりも最外年輪部分からの年輪数が多く存在しているものと考えられる。No.008、No.009の最外年輪箇所からの年輪数は定かではないが、造形的特徴や木材の風化具合から見るとNo.001、No.003の部材と同時代に制作されたものと推定される。よって、No.008、No.009の部材もまた、No.001とNo.003の推定伐採年代の最初年と最高年を総合した数値である1476年～1530年頃とほぼ同じ時代に伐採された木材であると推定される。

(2)マキ属材の伐採年代考察

今回の調査では、樹種同定調査によってマキ材であることが確認されたNo.002、No.007（上腕部）、No.012の3材を対象に放射性炭素年代測定を行った。測定結果はいずれも暦年較正が図りにくい年代であったことから、各部材の測定値はパーセンテージが異なる2年代から3年代に分かれた測定値となった。しかし、今回測定した3部材の結果は、いずれもほぼ同時代を示す測定値であるため、No.002、No.007（上腕部）、No.012の3材は、ほぼ同時代に伐採した木材を使用している可能性が高いと推測される。

測定した3部材は、No.002は木芯を除いた部材で接線面の最大長が20cm、No.007は木芯を除いた部材で接線面の最大長が約15cm、No.012は木芯を含めた部材で最大幅が約20cmである。そのため、木芯を除いた部材で最も接線面での幅が残るNo.002の部材の年代を考察してみたい。

No.002の測定値は、1686年～1732年（27.2%）、1808年～1897年（55.6%）、1902年～1928年（12.6%）の結果となった。No.002の木材が生息していた年代は、測定値の最小数値と最高数値からみると1686年～1928年となるが、その測定値の幅は約250年間となる。他の2部材のNo.007（上腕部）、No.012から得られた暦年較正值もほぼ同様の結果

であったが、放射性炭素年代測定の特性上、採取した木片から推測される伐採年がどの年代になるかは低いパーセンテージの年代であっても可能性があるため、伐採年代は250年間のいずれかの年に辺材年数を加えた年代という結果となる。

よって、今回測定したマキ属材の3点の測定結果を同時期の伐採と仮定した上で、それぞれの測定結果の最初年である1665年（No.012）と最後年である1928年（No.002）をマキ属材の総合的な放射性炭素年代測定結果とし、その暦年較正值に推定される辺材年数である50年を加算すると、マキ属材の推定伐採年代は1715年～1978年頃となる。

5-4.欠部材の制作年代に関する総合的見解

旧円覚寺残欠部材13点に対し、造形表現観察、樹種同定調査、放射性炭素年代測定調査などを行った結果、造形表現の中でも血管の表現の特徴から見ると2種類あることが確認され、樹種同定調査においてもカヤ材とマキ属材の2種類があることが分かり、放射性炭素年代測定の結果においても2種類の伐採年代に分れることが判明した。それらの2種類を総合すると、1種類は1476年～1530年頃に伐採されたカヤ材を用いて血管表現を柔らかく表現した造形的特徴を持ち、もう1種類は1715年～1978年頃に伐採されたマキ属材を用いて血管表現をかたく表現した造形的特徴を持つものに大別される。それらの結果と美術史の見解と交え、各部材の制作年代を考察したい。

(1)カヤ材の制作年代の考察

カヤ材と同定されたNo.001、No.003、No.008（前腕部）、No.009は、いずれも自然で柔らかい血管表現を示し、放射性炭素年代測定においてもほぼ同時代の結果が得られた。彫刻表現としては、血管表現以外の箇所を見ても極めて写実的で、技巧的な造形表現が確認できる。これらの特徴は、日本で中世頃から仏像制作の主流を担ってきた慶派や院派などの造形様式に通じる特徴であるといえる。また、各部材を接合していた面には、長方形の柄穴と長方形の柄が確認される。深く内削りを施し、長方形の柄で組み寄せる寄木の技法は、中世頃から中央で活躍した院派の仏師による制作像に多く見られる特徴であ

る。

円覚寺は京都の臨済宗寺院から来琉した介隠によって開山された。当時の臨済宗系の僧侶は、室町時代ごろの最有力仏所であった慶派系の仏所よりも院派系の仏所との結びつきが深いことが知られている。やや時代は下るが、円覚寺の本尊であった釈迦三尊像（沖縄県立博物館・美術館に保管）が体内の内削り面に墨書された銘文から院派系仏師の吉野右京（院達）によって寛文十年（1670）に造像されたこともその一つの裏付けとなろう。以上の造形的特徴と円覚寺仁王像の歴史的背景を踏まえ、樹種同定調査結果、年代測定結果を交えて考察したい。

樹種同定によって判明したカヤは、日本の東北から九州までの地域に自生しているが、沖縄県内には自生しない樹種である。また、カヤ材は平安時代初期に中国大陆から伝播した白檀製の檀像彫刻の日本国内の代用材として使用され、ヒノキとともに主要な彫刻材として中央の仏師によって使用されてきた。そのため、本仁王像にカヤ材が使用されていることは、日本の中央仏師による制作であることを示唆しているといえる。

次に仁王像がまつられていた円覚寺の沿革であるが、円覚寺の着工は1492年とされており、年代こそ明らかにはなっていないものの仁王像がまつられる総門もほぼ同時期に建立されたと推定されている。総門の中に安置される仁王像もまた、総門が建立された時期と同時期か、少なくとも遠く降らない時期に造像されたものと推測される。そのため、歴史的背景から見ると、総門にまつられた仁王像は、1492年から数年以内に制作されたと推定される。

旧円覚寺仁王像は、臨済宗僧である介隠によって円覚寺が開山された時期に合わせて造像された可能性が高く、残欠部材のうち4点は1476年～1530年頃に伐採された日本でしか使用されないカヤ材を用い、なおかつ写実的な造形と柄組みなどの構造的特徴を示していることから見て、院派系の仏師により室町時代後期の1492年頃に造像された可能性が高いと推定される。よって残欠部材のうち、No.001、No.003、No.008（前腕部）、No.009の4点は、室町時代後期に仁王像が造像された制作当初の部材といえよう。

(2) マキ属材の制作年代の考察

残欠部材のうち、No.002、No.004、No.005、No.006、No.007（前腕部）、No.007（上腕部）、No.008（上腕部）、No.008（肩付け根部）、No.010、No.011、No.012、No.013の部材は、すべてマキ属材が使用されていることが樹種同定調査によって明らかとなった。またそのうち、放射性炭素年代測定をおこなったNo.002、No.007（上腕部）、No.012は、いずれもほぼ同年代の測定値が得られ、それらの数値を総合した数値に推定辺材年数を加えて算出した本部材の推定伐採年代は1715年～1978年頃となった。

1715年～1928年頃に伐採したと推定されたNo.002、No.007、No.012のマキ属材による部材は、

形状観察調査時にカヤ材の部材とは造形様式に異なる点があることが確認されている。特に手足部材の血管の表現や彫刻するときに残される鑿の痕跡に差異が認められ、カヤ材の彫刻に比較すると彫法にも乱雑さがあることが確認された。それらの点を総合的に考察すると、マキ属材が用いられている各部材は、江戸時代後期ごろに行われた修理による補作部材であると考えられる。

以上の結果を総合的に判断すると、No.001、No.003、No.008（前腕部）、No.009が室町時代後期に制作された造像当初の部材であり、その他の部材はすべて江戸時代後期に行われた修理部材であると判断することができる（表5-3）。

部材番号	樹種同定結果	放射性炭素年代結果	血管表現	推定制作年代
No.001	カヤ	1431 ～ 1480 (95.4%)		室町時代後期
No.002	マキ	1686 ～ 1732 (27.2%)、1808 ～ 1897 (55.6%)、1902 ～ 1928 (12.6%)		江戸時代後期
No.003	カヤ	1426 ～ 1459 (95.4%)		室町時代後期
No.004	マキ			江戸時代後期
No.005	マキ			江戸時代後期
No.006	マキ			江戸時代後期
No.007前腕	マキ		堅い表現	江戸時代後期
No.007上腕	マキ	1691 ～ 1729 (26.5%)、1810 ～ 1923 (68.9%)	堅い表現	江戸時代後期
No.008前腕	カヤ	1287 ～ 1321 (39.1%)、1349 ～ 1392 (56.3%)	自然な表現	室町時代後期
No.008上腕	マキ		堅い表現	江戸時代後期
No.008肩付	マキ	1285 ～ 1320 (40.8%)、1351 ～ 1391 (54.6%)		江戸時代後期
No.009	カヤ		自然な表現	室町時代後期
No.010	マキ		堅い表現	江戸時代後期
No.011	マキ		堅い表現	江戸時代後期
No.012	マキ	1665 ～ 1692 (17.5%)、1727 ～ 1785 (47.3%)、1793 ～ 1812 (10.3%)、1920 (20.2%)	堅い表現	江戸時代後期
No.013	マキ		堅い表現	江戸時代後期

表5-3 樹種同定、放射性炭素年代測定、造形表現観察による総合的な制作年代考察結果

6. 仁王像に使われた色材の科学分析の知見

沖縄県立博物館・美術館が所蔵する円覚寺仁王像の修復事業が現在進んでいるが、それに使われた色材と膠着材を明らかにするために仁王像の着色部分から少量の試料片を採取し各種科学分析で分析評価した結果を報告する。

6-1. 分析試料

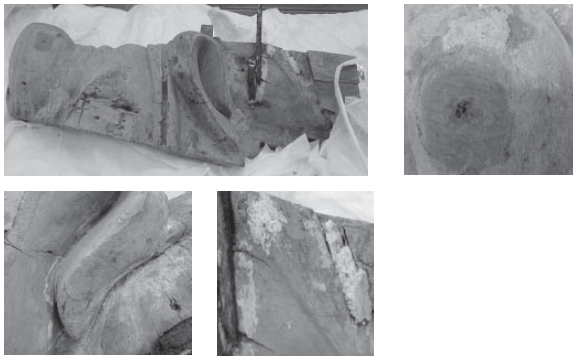
(1) 仁王像の胸部、腕及び脚部の各部位を写真6-1に示した。

(2) 仁王像から採取した着色材試料片を写真6-2に示した。

① 分析試料

(1) 仁王像の胸部、腕及び脚部の各部位を写真6-1に示した。

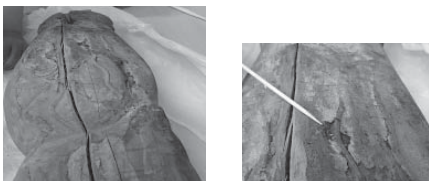
ア 仁王像の胸部 (写真6-1 胸部) : ここからsample A~Kを採取した。



イ 仁王像の腕部 (写真6-1 腕部) : ここからsample Lを採取した。



ウ 仁王像の脚部 (写真6-1 脚部) : ここからsample Mを採取した。



仁王像から採取したsample A, G, J及びLは青色、sample Bと Hは緑色、sample CとDは白色、sample E, I及びMは赤色だった。

なお、sample Jには布着せが認められた。これらのサンプルを種々の科学分析で分析評価した。

(2) 仁王像から採取した着色試料片

仁王像から得られた分析用試料片sample A-Mの表面と裏面の写真6-2に示した。

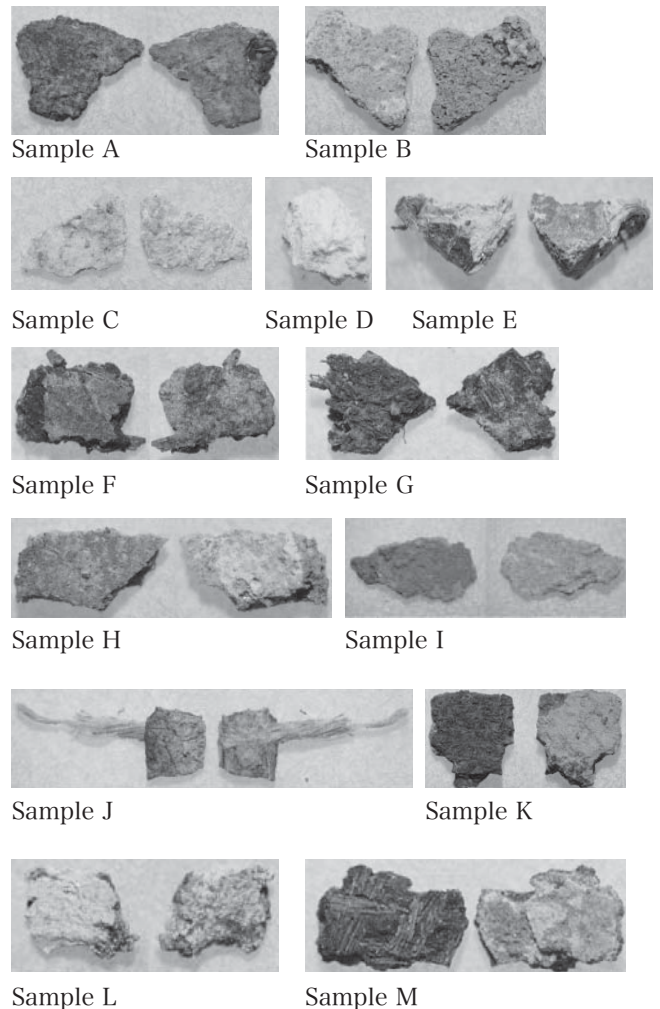


写真6-2 仁王像から得られたsample A~Mの写真

サンプルの位置	色	蛍光X線分析	分析結果	備考
腹部	外観	EDX	主な顔料	熱分解-GC / MS等
A	青色	Si, Ca, Fe (Coなし) , Pb	Fe (青色顔料) プルシアンブルー	乾性油
B	緑色	Si, Ca, Cu, Pb	緑青	
C	白色	Si, Ca, Zn	炭酸カルシウム	
D	白色	Ca	炭酸カルシウム	
E	赤色	Ca, Zn, Hg, Pb	朱、鉛丹	乾性油
F	褐色	Si, Ca, Fe, Pb	ベンガラ、鉛丹	乾性油
G	青色	Si, Ca, Fe, Pb	Fe (青色顔料)	
H	緑色	Si, Ca, Cu	緑青	乾性油
I	橙色	Si, Ca, Hg, Pb	朱、鉛白	乾性油
J	褐色	Si, Ca, Fe, Pb	ベンガラ、鉛丹	<i>Toxicodendron vernicifluum</i> ウルシ、 乾性油
K	青色	Si, Ca, Fe, Pb	Fe (青色顔料)、鉛白	
腕部				
L	青色	Si, Ca, Fe, Zn	Fe(青色顔料)	
脚部				
M	褐色	Si, Ca, Pb	鉛丹	乾性油

表6-1 仁王像の色材の科学分析の結果

6-2.分析方法

(1)クロスセクション分析

分析試料を53型エポキシ樹脂で包埋し、試料面を切断し、研磨し、試料の薄片を作成した。これを偏光顕微鏡 Eclipse LV 100 POL (Nikon) を用いて観察した。

(2)蛍光X線分析

堀場製作所製ED-XRF分析装置 (Horiba) を用いて試料中に含まれる元素を分析し、またT/IRスペクトル分析装置 (Thermo Fisher SCIENTIFIC) を用いて試料断面のFT/IRスペクトルを測定した。

(3)熱分解-GC (ガスクロマトグラフ) / MS (質量分析)

ガスクロマトグラフ質量分析装置 (Agilent Technologies) と熱分解装置 (フロンティア・ラボ)、キャピラリー・カラム (30 m ×0.25 mm ×0.25 μm) を用いて分析した。

6-3.分析結果及び考察

仁王像の着色試料片をマクロスコブ観察、クロスセクション分析、FT-IRスペクトル分析、熱分解-GC / MS分析及び蛍光X線分析-EDX分析など各種科学分析で分析・評価した。その分析結果を表6-1にまとめた。Sample Aの青色部分を蛍光X線分析したところCo (コバルト) は認められずFe (鉄) が確認できたことからプルシアンブルーが利用されたと考えている。また仁王像の着色部分と色材の膠着材は熱分解-GC / MS分析と蛍光X線分析で検討した。その結果多くは油の存在が認められたことから絵の具のように顔料を油に分散して使われたと考えている。Sample Jは熱分解-GC / MS分析から漆が認められ、蛍光X線分析からFeが認められたことからベンガラ漆が使われ、また油も認められたことから密陀絵のようにCu (緑青)、Pb (鉛白あるいは鉛丹) で加飾し着色されたと考えている。以上が主な分析結果と考察の概要である。

7. 円覚寺金剛力士像の模造復元における参考事例

琉球への仏教伝来は、14世紀後半に頼重（?～1384年）が来琉したことに始まり、次いで1450年（宝徳2年）に臨済宗僧の芥隠承琥（?～1495年）が来琉している。芥隠は第一尚氏の尚泰久、尚徳と第二尚氏の尚円、尚真の各王に仕え、1492年（弘治5年）に芥隠は尚真王のもと円覚寺を創建する⁷⁻¹。方丈や大殿（仏殿）、法堂、山門（三門）などが建立され、1494年に伽藍が完成したとしている。総門及び金剛力士像（仁王像）の竣工時期は史料から明らかにできないが、1494年までには完成したとみられる。

先の材質調査・年代測定の知見から、仁王像残欠部材の樹種同定により、同像の用材にはカヤ材とマキ属材が使用され、また年輪年代測定によりカヤ材の伐採時期が1476年～1530年頃に比定され、マキ属材の伐採時期はおおむね1715年以降であるとの測定結果を得ている。

カヤ材は琉球では自生しないが、本土（大和）では広く分布しており奈良時代後期以降、仏像の用材などにカヤ材が使用されている。マキ属材のイヌマキ（チャーギ）は本土にも分布するが仏像等の用材として使用されることはない。イヌマキは琉球では県指定文化財の旧円覚寺白象像（1521年）など仏像等の用材や建築用材として一般に使用されることから、仁王像は15世紀後半に本土で制作されて創建時の円覚寺に安置され、その後琉球での補修などはイヌマキ材が使用されたと考えられる。また円覚寺仁王像の請来には開山である芥隠が大きく関与したと推測される。

上記検討の際に岡田靖氏から旧円覚寺仁王像の作者が院派仏師ではないかのご教示を得た。円覚寺を創建した芥隠が臨済宗僧であったことを考えると卓見に富んだご教示で、年輪年代測定で得た1476年～1530年前後の院派仏師による仁王像の類例が、今回の模造復元事業に際して重要な参考資料になると思われた。そこで、院派仏師の仁王像を円覚寺仁王像の模造復元の参考資料に資することとした。

7-1. 室町時代の院派仏師

現状では、室町時代における臨済宗での造像や院派仏師に関する研究はあまり進展しているとは言い

難いが⁷⁻²、定朝の孫あるいは孫弟子にあたる院助を祖とする院派仏師は、中世には室町幕府と深く結びついていた。

1339年（暦応2年）に足利直義は丹波国国分寺地頭職を京都・等持院本尊料として仏師院吉に等持院本尊を造立させ⁷⁻³、院吉は等持院大仏師職となっている。また『天龍寺造営記録』によれば、1342年（康永元年）には院吉が天龍寺本尊釈迦三尊像の御衣木加持を行っており⁷⁻⁴、丹波国国分寺地頭職は院吉以降、院広、院誉、院実と受け継がれていった。また1404年（応永21年）には印慶（院慶）が大徳寺山門釈迦如来像（旧仏殿本尊）を制作し、1493年（明応2年）には院勝が竜安寺日峯宗舜像を制作するなど、臨済宗寺院の造像は院派仏師が関与するところが多い。

ただこの期の院派仏師は分立していたようで、先の印慶も「五条万里小路大仏師」と名乗り、「定」や「覚」を系字とする「万里小路大仏師」の存在や「四条東洞院仏師」を名乗る仏師も現れている。彼らは院派仏師との密接な関係を窺わせながらも個々の作風は院派仏師とやや隔たりのある作品を制作している。また「院」を系字とする院派仏師の系譜は、1502年（文亀2年）の院徳作福岡・坊の薬師堂薬師如来像の造立を最後に途絶えてしまう⁷⁻⁵。ここでは院派仏師系と思える仏師の作品も含めて参考作品をみてみたい。

7-2. 院派仏師の仁王像

一般に仁王像の形勢は、おおむね2種類に分類できる。ひとつは1203年（建仁3年）に運慶らが制作した東大寺南大門仁王像を代表とする像で、もうひとつは法隆寺中門仁王像をはじめとする像である。前者は三重・府南寺像など全国でも数例しか確認できない形式で、東大寺像の形勢は中国・宋代仏画の形式を摂取改変しながら造られたとされている⁷⁻⁶。後者は、阿形像は左肘を曲げて肩上方に挙げて金剛杵をとり、右手は下におろして掌を下に向けて五指を伸ばす形勢を採り、吽形像は左手を下におろしてやや肘を曲げて全指を曲げ、右手は肘を曲げて胸あたりで掌を正面に向けて五指を伸ばす形勢で、一般的な仁王像の規範として、各時代を通じて広く採用され、全国各地に作例が認められる伝統的な形勢と

みられる。院派仏師の仁王像に関しては、中国・宋代仏画の形式に基づく形勢を採用する事情も特になく、円覚寺像残欠部材の観察からみても後者を規範としたとみるのが妥当であると思われる。

では、鎌倉時代末期から室町時代にかけての院派仏師の仁王像をみていきたい。

(1) 称名寺仁王像

像高（阿形）394.5cm（吽形）397.2cm

神奈川県横浜市の称名寺山門に安置された仁王像（県指定）は、1970年に解体修理が行われ、像内墨書銘から1323年（元亨3年）に大仏師法印院興、法橋院救、法橋長賢、法橋快勢によって造立されたことが判明している⁷⁻⁷。

両像ともに宝髻を結い天衣、裳をつける一般的な姿で、阿形像は左手を屈臂して肩上方に挙げて金剛杵をとり、右手をやや捻り気味に下におろして掌を下に向け五指を伸ばす。腰を左に捻り右脚を遊脚として立つ像である。吽形像は右手を曲げて胸横外側で掌を正面に向け五指を伸ばし、左手は下におろして五指を曲げ、腰を右に捻り左脚を遊脚として立つ像である。両像とも面貌は眉を逆立てて目を凝らし、軀部には隆々とした筋肉を、腕には太い血管を表している。また裳裾は大きく翻る点は院派仏師の作風をよく示し力強い形姿としてまとまった造形である。ただ胸部と腰以下に厚みと張りがあるのに対して腹部を細身に造っており、胸部と腰以下との繋がりがやや不自然であると思われる。

構造は基本的に頭体とも四方から箱型に材を寄せており、軀部は柱状の骨組みの周囲に複数の板材を貼り付けて軀幹部を形造る。そのほか各部には多数の小材を寄せている。こうした特殊な造像技法は称名寺像が4m近い像高を計る巨像であるために採用された技法といえる。

称名寺像は大仏師院興らによって1323年（元亨3年）に制作されたが、院興は称名寺像制作の15年前の1308年（徳治3年）に称名寺釈迦如来立像・十大弟子像を院保のもとで制作しており、称名寺像制作中にも神奈川・覚園寺阿弥陀如来坐像（1323年）を造立している。

称名寺像は制作が鎌倉時代末期にあたり、また4m近い巨像で、円覚寺像の想定像高である約190cm

とはかなり隔たっており、円覚寺像の模造復元にあたって直接的な参考とはなり難いが、院派仏師による金剛力士像の形姿や体部軀幹部の柱状の骨組み、特に上体部と両脚部との接合状況は模造復元に際して大いに参考になるものと思われた。

(2) 法住寺仁王像

像高（阿形）239.2cm（吽形）247.7cm

石川県珠洲市の真言宗法住寺山門に安置する仁王像（市指定）は1995年に解体修理が行われ、胎内より納入文書と像内銘記が確認されて、同像が1453年（享徳2年）に院派仏師の院勝・院超によって制作されたことが判明した⁷⁻⁸。

法住寺像は、称名寺像でみた胸部と腰以下との不自然な繋がりを胸部、腹部、腰以下に適度な量感を持たせて自然な繋がりにしたほか、片脚を直立に近い状態に造り、称名寺像の誇張気味であった遊脚の開きを是正して自然で動勢のある姿勢にしている。裳の折り返しや裳裾は大きく翻りながらよく整理されて煩雑感はなく、院派仏師正統の特徴をよく示した像とみることができる。

院勝に関しては、美術研究本『本朝大仏師正統系図并末流』に京都高辻に住み、1464年（寛正5年）に京都・広隆寺楊廬木坊の毘沙門天像を制作したことが記されており⁷⁻⁹、1481年（文明13年）には後述の仲禅寺仁王像を、1493年（明応2年）には京都・龍安寺日峯宗舜像を制作している。院超の事績については不詳で、事績も現状では法住寺像以外にみいだせず、あるいは次に掲げる「院朝」の誤記であったと思われる。

(3) 摠見寺仁王像

像高（阿形）212.8cm（吽形）211.5cm

滋賀県近江八幡市の安土城跡に建つ摠見寺は、天正年間(1573年～1592年)に織田信長が安土城築城の際に自らの菩提寺として創建した臨済宗の寺院である。摠見寺の堂舎は近隣寺院から徴発移築され、三重塔は1576年(天正4年)に甲賀長寿寺より移築され、仁王門も同じ頃に甲賀より移築したとみられ、棟木には「元亀二年七月甲賀武士山中俊好建立」の墨書銘が認められ、1571年に建立したことが判明する。

門内の仁王像(重要文化財)は、阿形像頭部内に「仏師いなは(花押)作」の墨書銘、吽形像頭部内に「応仁元年」(1467年)の年紀と「たか御い大富因幡院朝(花押)作」の墨書銘が確認され、因幡院朝によって1467年(応仁元年)に制作されたことが判明する。

惣見寺像の形勢は基本的に阿形像、吽形像ともに称名寺像と同じ一般的な仁王像の形勢を採用している。たくましい軀部をもち、よくまとまった造形ながら法住寺像と比較すると、両像ともに胸部、腹部、腰以下に適度な量感を持たせて自然な繋がりになっているものの惣見寺像では眉を大きく寄せて頬や顎の肉付きを強調して憤怒の表情を強調し、上半身は厚い造形ながらも胸部はやや平板な造形表現となっており、両脚も膝を露わに表現して長くみせるなど、全体に細身の印象を受ける造形となっている。

吽形像墨書銘の「たか御い大富」は「たか津じ大宮(高辻大宮)」の誤写とみられ、先に触れた院勝の居所である「高辻」と附合する。このことから院朝は院勝と深く関係する仏師とみられ、加えて1439年(永享11年)に京都・雲居寺大仏造像に関して奈良仏師と争論になった高辻大宮仏師(院執か)の系譜をひく者であったことを暗示させるが、根立氏が指摘されたように院執、院勝、院朝は丹波国国分寺地頭職を相伝しておらず、院派仏師内での院朝の位置づけは難しい。

(4)仲禅寺仁王像

像高 (阿形) 217cm (吽形) 218cm

京都府京丹後市仲禅寺の仁王像(市指定)は、猪川和子氏による紹介⁷⁻¹⁰があり、吽形像の前面首内部に「大仏師大輔法眼院勝」「文明十三年三月中旬」の墨書銘が認められ、「大輔法眼院勝」によって1481年(文明13年)に制作されたことが知られる。「大輔法眼院勝」は法住寺像の作者である院勝と同一人と思われる。仲禅寺像はこれまでみた院派仏師の仁王像の形勢とほぼ変わらないが、その表現は大きく異なる。特に阿形像の面貌、胸部の表現、裳裾の翻りなどは吽形像に比べて稚拙な表現に留まっている。

『丹後国竹野郡誌』に引用された『丹哥府志』(仲禅寺)吉祥院によれば⁷⁻¹¹、仲禅寺仁王像が大破していたために1753年(宝暦3年)に京都室町高辻

下町町の仏師棟梁水谷作之進が弟子甚兵衛と近江の下細工師平八を率いて仁王像を修理したことが記され⁷⁻¹²、仁王像がこの時に大きく補作されたことを記している。猪川氏の報告でも阿形像に関しては、頭部以下の大部分は新補とされて、吽形像の頭部もヒノキ材、軀部材はカヤ材とされており、1894年(明治27年)に玉眼を修復した銘記を紹介している。このことから円覚寺像模造復元の参考となるのは吽形像のみで、特に上半身、裳の形状が参考になると思われる。

作者の院勝は仲禅寺像では「大輔法眼院勝」と名乗っている。「大輔」の官職を肩書とした仏師としては1436年(永享8年)に京都・西正寺愛染明王像を制作した大輔法眼覚伝がおり、類例としては永享年間(1429年～1441年)に京都・蓮華王院千手観音像640号像にみえる「大夫法眼高辻富小路」を名乗った定弁、1495年(明応5年)に焼亡した奈良・長谷寺十一面観音像の再興をめぐる南都仏師の椿井春慶と競望した万里小路大仏師大輔公覚蔵がいる。彼らは院派仏師の系譜を引く者であるとされており⁷⁻¹³、院勝も院派仏師傍流のひとりであったことが考えられる。

7-3.院派仏師周辺及びその他の仁王像

以上、14世紀前半から15世紀後半にかけて院派仏師によって制作された仁王像4件についてみてきた。厳密に考えれば、円覚寺像は1494年の円覚寺創建竣工時期までに完成したとみられるため、その模造復元にあたって直接参考となる事例は1453年の法住寺像と1467年の惣見寺像のみで、参考事例としてはいささか心もとない。そこで院派仏師から分立した可能性のある仏師による滋賀・園城寺(三井寺)大門仁王像と近年、解体修理によって構造が明らかとなった1597年(慶長2年)作の愛知・甚目寺仁王像を参考事例として掲げてみたい。

(1)滋賀・園城寺仁王像

像高 (阿形) 211.6cm (吽形) 215.0cm

滋賀県大津市園城寺(三井寺)大門の仁王像は、いずれも角材を複数寄せながら、適宜に材を足した寄木造とし、玉眼、彩色像である。

園城寺像は、これまで1456～57年(康正2～3

年)の作と考えられてきた⁷⁻¹⁴が、近時の修理に伴って造像銘札が確認され、1456年(康正2年)2月に造り始められ翌年6月1日に完成し、「仏所長弁法印 大工衛門四郎」による制作であることが明らかとなった⁷⁻¹⁵。

園城寺像は、大門とともに「江州甲賀西寺」(甲賀郡石部町常楽寺)の仁王像として造立安置され、その後に豊臣秀吉の伏見築城に際して大門は伏見城城門として移築され、仁王像は京都方広寺照高院に預けられた。1601年(慶長6年)、徳川家康は伏見城から門、照高院から金剛力士像を園城寺へ寄進、再移築されて今日に至っている。

園城寺像は鎌倉時代の余風をよく伝えるもので、巨像ながら造形上の破綻もなく極めてバランスの取れた作品である。

作者の長弁については未詳ながら、南北朝から室町時代にかけて「弁」を系字とする仏師がいる。「弁」を系字とする仏師については、これまで三条仏所(円派仏師)系の仏師とみられてきたが⁷⁻¹⁶、最近、応永10年に京都・本光院地藏菩薩像を制作した祐弁、嘉吉2年(1442)に京都・金地院地藏菩薩像を制作した良弁などを院派仏師系の仏師とする説⁷⁻¹⁷もあり、後者の立場にたてば、園城寺像も円覚寺像の参考事例としてみるのが十分可能である。

(2)愛知・甚目寺仁王像

像高 (阿形) 348.0cm (吽形) 357.7cm

愛知・あま市にある甚目寺仁王像(県指定)は、これまで長く運慶作の伝承が付せられ鎌倉時代の作とみられていたが、近年の解体修理時に墨書銘が発見され、1597年(慶長2年)に大大工西村又蔵と吉田彦宗が小工市蔵・吉蔵を率いて制作したことが明らかとなった⁷⁻¹⁸。

作者の吉田彦宗、西村又蔵は「大大工」、市蔵、吉蔵は「小工」を肩書とし俗名を名乗っている。

「仏師」以外の肩書をもち俗名を使用して仏像を制作した仏師集団として15世紀から16世紀にかけて南都を中心に活躍した宿院仏師がいる。宿院仏師は当初、「番匠」として海龍王寺地藏院沙弥仙算や東大寺大法師実清の仏像制作に従事し仏像の用材を割ったり、各部材の組み合わせ(木寄せ)に従事しながら造像技術を習得し、実清没後に独立して造像活

動を行った仏師集団である⁷⁻¹⁹。

大型の仏像である金剛力士像の木割をはじめ、裳裾端を台座に付けずに両脚で自立することが可能な木寄せの方法など、金剛力士像の制作には番匠や大工の存在は不可欠である。園城寺像でも大工衛門四郎が関与しているほか、東大寺南大門金剛力士像阿形像の金剛杵墨書銘には、運慶ら大仏師、小仏師のほかに「番匠十人」と記され、さらに『東大寺統要録』「造仏篇」⁷⁻²⁰によれば、建久7年の東大寺大仏殿両脇侍像造立にも「番匠八十人」「杵人八十人」の関与が記されている。『東大寺統要録』には建久5年の東大寺中門二天像造立に「大工宗包」「小工十一人」「小工九人」とみえることから、甚目寺像作者の「大大工」「小工」という肩書もあながち不自然でないと思われる。

こうした造像関係の歴史を顧みれば、吉田彦宗や西村又蔵らは、他の仁王像制作に従事する傍らで金剛力士像の造像技術を習得し、甚目寺像を自らで制作したものと推測できる。その作風は解体修理に至るまで長く運慶作と誤認されてきたことから高い水準を誇る作品といえ、大工、小工による金剛力士像として好個の事例とみられる。

7-4.まとめ

以上、円覚寺仁王像の模造復元の参考資料として、院派仏師及び周辺仏師による円覚寺創建前後の6例の仁王像についてみてきた。

仁王像の造形史については、全国各地に作例が残るものの、現状では個別作品の研究は進展したものの、大系だった仁王像の研究は1978年の倉田文作『仁王像』⁷⁻²¹以降、進んでいないのが現状である。

そうした状況のなかで旧円覚寺仁王像の模造復元作業は困難を極めたが、幸いにも残欠部材の材質調査・年代測定から、琉球では伐採されないカヤ材を使用した点、カヤ材の伐採時期が1476年～1530年頃に比定された点は、模造復元の大きな手掛かりとなった。また比定された1476年～1530年頃は臨済宗僧の芥隠による円覚寺創建期にあたり、当時の臨済宗と院派仏師の関係から円覚寺像の造像者が院派仏師であるとの岡田氏の教示は、参考事例を考察するうえで有力な観点であった。室町時代以降の院派仏師の動向についても未だ研究途上にあるが、法住

寺像(1453年)、園城寺像(1457年)、摠見寺像(1467年)という院派仏師及びその周辺仏師による良好な資料を見出すことができた。加えて形勢の変化や細部、構造等を理解するために称名寺像(1323年)、仲禅寺像(1481年)、甚目寺像(1597年)を比較参考資料として掲げた。

以上の情報を模造復元に於ける参考事例として円覚寺像模造復元の担当者である岡田氏に報告を行った。

8. 復元の制作方針と制作工程の現在の状況

旧円覚寺仁王像の残欠部材の造形観察と自然科学的な樹種同定調査および放射性炭素年代測定または円覚寺に関する歴史的な背景などを交えた総合的な考察の結果、本仁王像は室町時代後期の1400年代末から1500年代ごろに制作されたと推定され、さらに江戸時代後期の1700年代から1800年代ごろに大規模な修理がなされたと推定された。円覚寺仁王像の復元は、残欠部材を第一次資料としておこなうが、残欠部材は13点しか現存しておらず、阿吽両像を合わせた全部材の5分の1にも満たない量にしかない。さらに、円覚寺仁王像を復元するにあたって現存しない部材を想定する場合、沖縄戦によって被災する直前の状態、すなわち室町時代と江戸時代の二つの制作年代が混在した状態の仁王像を復元することは、現時点で詳細な被災前の写真や図面などの資料が確認できない以上、極めて困難である。そのため、今回の旧円覚寺仁王像の復元計画では、旧円覚寺仁王像の制作年代と推定された室町時代後期の制作当初の状態の復元を目指すこととした。

室町時代後期の制作当初の状態を復元するためには、年代測定調査によって精査した残欠資料のうちの制作当初の部材と推定されたNo.001、No.003、No.008(前腕材)、No.009の4部材が、復元根拠の第一次資料となる。そのため、まずはそれら4点の残欠部材を株式会社京都科学に依頼して型取りし、FRPに置き換えることとした。

FRPに置き換えた制作当初の部材を精査したところ、No.001は阿形像の体幹部前左前面部材であることは状態調査時に推定されていたが、体幹部右背面部材と推定されていたNo.003の肩の矧ぎ面と、

右腕部材であるNo.009の矧ぎ面の形状と柄組みが一致することが新たに判明した。No.009は阿形像の右腕部材であることがわかっていたため、それと接合されるNo.003は阿形像の体幹部右背面部材となる。前腕部材であるNo.008もまた、阿形像の振り上げた左腕の部材であるため、現存する制作当初の部材4点はすべて阿形像の部材であることが確認された。そのため、復元制作は第一次資料が揃う阿形像から始め、阿形像の完成後に対となる吽形像の制作を行うこととした。

8-1. 復元根拠となる類似作例調査

前述した通り、第一次資料となる制作当初の残欠部材は4点しか現存しておらず、しかもその全てが阿形像のものであった。阿吽両像を構成する全部材の10分の1にも満たない資料をもとに復元することは容易ではない。そのため、本旧円覚寺仁王像と同時代、同系制作者による類似作例を調査することとした。

旧円覚寺仁王像は、長谷氏も指摘した通り、残欠資料に見る造形的、技法的特徴や円覚寺の歴史的関係性から、院派に属する仏師によって制作された可能性が高いと推定されている。制作年代に関しては、自然科学的な年代測定の結果によって室町時代後期であると推定された。そのため、院派仏師によって室町時代後期ごろに制作されたことが判明している全国に存在する仁王像を対象に、現地調査を实践することとした。

(1)法住寺仁王像（写真8-1～8-6）

法住寺仁王像は、室町時代後期の享徳二年（1453）に院派仏師の院勝と院超（朝？）によってアスナロ材を用いて造像されたことが判明している。旧円覚寺仁王像残欠部材の造形観察や年代測定調査の結果、1500年ごろに院派仏師によって造像されたものと推定している円覚寺仁王像の制作当初の復元において、ほぼ同時期、同派仏師による近しい姿勢、造形を表す法住寺像は、最も参考になる類似作例と

いえる。

法住寺仁王像は、平成11年に全面的な解体修復が行われ、その際に全体写真や解体写真が撮影されたため、当時の修理報告書によって仁王像の全体像や木組みの様子を知ることができる。さらに現地調査にて入念な実物観察と写真撮影を行うことでより詳細な情報を入手し、それらをもって円覚寺仁王像の復元根拠の第二次資料とすることとした。



写真8-1 法住寺 吽形像



写真8-2 法住寺 阿形像



写真8-3 法住寺 阿形像右腿部分



写真8-4 法住寺 阿形像背中部分



写真8-5 法住寺 阿形像左足部分



写真8-6 法住寺 阿形像右膝部分

(2) 惣見寺仁王像 (写真8-7～8-10)

惣見寺は安土城敷地内に建立された織田信長の菩提寺である。現在は本堂も現存していないが、仁王門と仁王像は本堂跡から石段を下った場所に当初の状態で現存している。惣見寺仁王像は、像内の銘より室町時代後期の1467年に院派仏師の因幡院朝によって造像されたことが判明している。

惣見寺仁王像は、円覚寺仁王像と制作年代、制作仏師の系統が近似しているばかりでなく、造形的特

徴にも類似点が見受けられる。特に上半身の奥行きを分厚くとする造形は、円覚寺像の体幹部左前面部材であるNo.001と体幹部右背面部材であるNo.003の残欠部材を組み合わせた時にみられる上半身の分厚い造形表現に極めて近く、復元制作を行う際に大いに参考になる類似作例と言える。吽形像の姿勢は法住寺像の類例とは異なるものの、旧円覚寺残欠部材と共通する造形的な特徴をもって、第二次資料として復元制作の参考としたい。



写真8-7 惣見寺 吽形像上半身



写真8-8 惣見寺 阿形像上半身

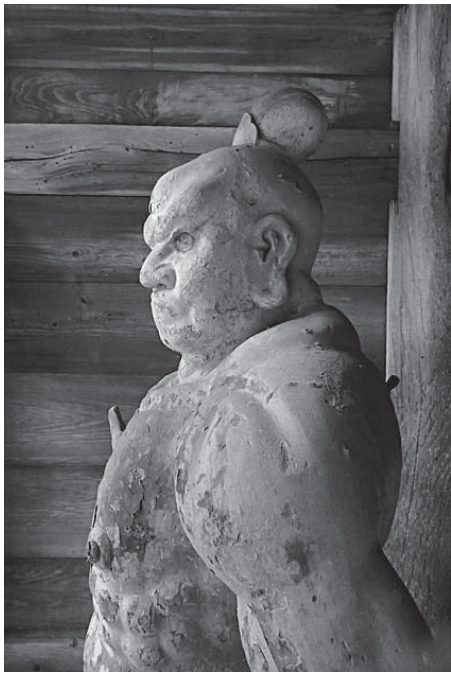


写真8-9 總見寺 吽形像左側面部



写真8-10 總見寺 阿形像右腰部

(3)園城寺（三井寺）仁王像（写真8-11～8-14）

滋賀県園城寺（三井寺）の山門に安置される仁王像は、康正二年～三年（1456～1457）に仏所長弁法印、大工衛門四郎によって造像されたことが判明している。

肉身部の表現は円覚寺像とやや異なるものの、大ぶりの裾の衣文表現には円覚寺像の当初部材と似た

表現が見受けられる。特に吽形像の右足（軸足）の膝上で巻き上げる裾の表現は、円覚寺阿形像当初部材の左膝上の裾の表現と酷似しており、同箇所の周辺部の復元の際に大いに参考になる。法住寺像や惣見寺像と合わせ、本像の裾部の衣文表現を参考事例に加えたい。



写真8-11 三井寺 阿形像頭部



写真8-12 三井寺 吽形像頭部



写真8-13 三井寺 阿形像体幹部正面部



写真8-14 三井寺 吽形像裙部分

8-2.阿形像の造形に関する復元根拠について

粘土による復元原型制作はまず、第一次資料となる旧円覚寺仁王像の残欠部材を型取りしてFRPに置き換え、それらの当初位置を十分に検証したうえで心棒に組み込みつつ、欠失部分に粘土をつけながら復元を進めることとした。

欠失部の造形は、第一次資料である残欠部材の造形を軸としつつ、残欠部材と同時代（室町時代）、同系仏師（院派）の制作による法住寺像や惣見寺像を第二次資料として、欠失する部材の復元考察を行った。特に阿吽両像ともに欠失している頭部に関しては、体幹部の造形的特徴が近い法住寺像を復元の参考にした。また、胸部、左腕上腕部、右手先、右胸部、背部、臀部、右腰側面、両脚部などは、隣接する当初部材からの形状の連続性を意識しつつ、法住寺像、惣見寺像の造形を参考にして復元制作を行った。

一方で当初部材の左膝上の裙の形状は、上方に大きく巻き上げるような形状をなしており、参考作例とした法住寺像の当該部分とは形状が大きく異なっていたため、別の類似例を探す必要があった。資料上での調査を行った結果、滋賀県園城寺（三井寺）の仁王像が円覚寺像と同様の形状をなしていること

が確認されたため、現地調査を实践した。園城寺像において、円覚寺阿形像の当初部材の左足膝上の裙の形状と同様に巻き上げたような形状の裙の衣文は、吽形像の右足の膝上に表されているが、ともに軸足の膝上に表現された裙の巻き上げであるため、撮影した写真を反転して復元制作の参考とした。

他方で、円覚寺仁王像残欠部材の後補部材と判定された部材の中には、左腰側面材と推定される部材No.002が存在している。No.002は当初部材とは造形的な差異が見られるものの、後補として補った際に、修理を行った当時の仏師が、当初部材との整合性を考慮した可能性が高いと考えられる。また、後補部材を制作した修理当時は、朽損した当初部材が現存していた可能性も考えられ、左腰側面材の部材の衣文の造形には、後補部材とはいえ当初部材の形状がすくなく反映されているものと推測される。よって、欠失する阿形像の左腰側面の裙の衣文表現の復元に関しては、円覚寺残欠部材の左腰側面材を参考にして復元制作を行うこととした。

また、旧円覚寺仁王像残欠部材には裙裾と推定される部材No.006が存在している。この部材は正面から見て右から左になびく形状であるため吽形像の裙裾部材と推定されるが、先の阿形像左腰側面材の

後補部材と同様に、後補部材とはいえ後補部材制作の際にその形状に当初部材の形状を反映させたものと推測されるため、阿形像の裾裾の復元においても当該後補部材の写真データを反転させた形状を復元の参考とした。

同じく左手先に関しても、円覚寺残欠部材の中に後補部材No.011が現存するため、今回の復元根拠の参考とした。しかし、円覚寺残欠部材のNo.011は呬形像の左手で、拳を握る形状であるが、室町時代の院派の仁王像の類例から考察すると阿形像の左手には金剛杵を握っていた可能性が高いと考えられるため、阿形像の左手の復元には法住寺像の左手先も参考に復元を行った。

以上のように、阿形像の造形の復元根拠について考察したが、その考察結果を各部ごとにまとめて以下に記す。

A. 頭部部

円覚寺像の頭部部材は現存しないため、第二次資料とした法住寺像を主に参考とした。

B. 右腰部

右腰部の衣文は、法住寺像を主な参考対象とし、本像の腰のひねり具合や裾裾の形状との整合性を考慮しつつ復元を行った。

C. 右腿部

右腿前面の衣文は、法住寺像を主な参考対象とし、本像の腰のひねり具合や裾裾の形状との整合性を考慮しつつ復元を行った。

D. 右裾裾部

右裾裾部の形状は、円覚寺像の後補部材No.006を参考とした。

E. 左腕部

左腕の造形は、当初部材である前腕部を基軸として、円覚寺像の後補部材と法住寺像を参考に復元を行った。

F. 左腰部

左腰の衣文は、円覚寺像の後補部材No.2を参考にして、隣接する当初部材の造形や本像の腰のひねり具合との造形の連続性や形状の整合性を考慮して復元を行った。

G. 左膝上の裾翻り部

当初部材の左膝の上部の衣文は、大きく上部に

巻き上がる形状をなしている。その形状に類似する作例として、園城寺（三井寺）像の当該部の形状を参考にし、隣接する当初部材の造形との連続性を考慮しつつ、Fの左側面の衣文の形状との整合性を意識しながら復元を行った。

以上の各部の復元根拠については、(写真8-15)を合わせて参照されたい。

(写真8-15) 想定復元根拠



8-3.復元粘土原型制作工程報告

(1)当初部材の木組みの検証と阿形像の心棒制作

沖縄県立博物館・美術館所蔵の旧円覚寺仁王像残欠部材のうちの当初部材からFRPに型取った体幹部左前面部材（No.001）、体幹右背面部材（No.003）、右腕部材（No.009）を用い、制作当初の木組みの状態を検証した。当初の木組の検証結果に基づき、FRPの残欠部材を空間上の当初あった位置を模索した。（写真8－16）

No.001とNo.003には、それぞれ前後左右に矧ぎつけるための矧ぎ面とNo.003の内側の矧ぎ面が直線状につながるように位置決めした。なお、No.001は幅20cm、奥行き20.2cmであり、No.003は幅20.2cm、奥行き18.5cmの角材を用いており、FRPを用いた木組みの検証によって本像の体幹部は上方から見るとほぼ同寸の木材4材を前後左右に田

の字状に組み寄せて主幹部を構成していたことが判明した。

これらの木組みの検証により、阿形像の体幹部幅と体幹部厚も明らかとなった。また、体幹部の位置が確定したことによってNo.003に接合される右腕部材（No.009）の位置や角度も確定されたが、下方へねじりながら伸ばす右腕材が通形の仁王像に比べて体幹部からやや離れた姿勢を取ることが明らかとなった。

当初部材の位置の検証の結果をもとに、FRP部材を組み付けた阿形像の心棒に粘土の荒付けを行いつつ、足の長さや頭部の向きなどを、残欠部材の脚部材No.012、No.013の寸法や類似作例などを参考にしながら設定し、長さや角度などを調整しながら心棒の制作を進めた。（写真8-17、8－18、8－19）



写真8-16 当初部材 (FRP) の組み上げ検証



写真8-17 阿形像心棒制作



写真8-18 阿形像心棒への当初部材 (FRP) の組み付け



写真8-19 阿形像両脚部の心棒制作

(2)阿形像の復元粘土原型の制作

①粘土原型の荒付け

粘土の荒付け作業は、まずはFRPの当初部材の間を埋めるように粘土の肉付けを行い、当初部材から推測される本像のボリュームを復元していった。

類例参考作品とした法住寺仁王像の阿形像の姿勢や各部のバランスを参考にしながら、当初部材との整合性をとりつつ、粘土付けを進めていく。頭部、

脚部、腕部の位置や方向を模索するとともに、脚部の長さを台座の高さで微調整しながら定めていった。(写真8-20)

頭体幹部のボリュームが概ね整ったのち、左上腕部に粘土付けを行い、FRPで型取った左前腕部 (No.008) の当初部材を組み付けながら左腕の形状を制作した。(写真8-21)



写真8-20 阿形像粘土原型荒付け



写真8-21 阿形像粘土原型荒付け

②粘土原型の中付け

全体のバランスが取れたことを確認したのち、残欠部材の造形と第二次資材とした法住寺仁王像の造形および姿勢を参考にしながら、造形の作りこみを行っていく。

阿形像の体幹部は、左正面材と右背面材に当初部材が存在するため、制作当初の体幹部の幅と奥行きを知ることができるが、当初部材である右背面材の僧帽筋の筋肉表現の隆起が激しく、当初の造形は奥行きが深くて僧帽筋を激しく隆起させた造形であったことが知れる。それらの特徴に対し、参考作例とした法住寺像は比較的大人しい表現である一方、惣見寺像は深い奥行きと隆起した僧帽筋表現を示すため、体幹部のボリュームに関しては、惣見寺像を主に参考にしながら進めることとした。(写真8-22)



写真8-22 阿形像粘土原型中付け

③粘土原型の仕上げ

全体の姿勢、バランス、ボリュームが整った後、細部の作り込みを進めていった。

細部の造形は、第一に当初部材の造形を参考にし、頭部や脚部などの当初部材にはない表現に関しては法住寺像を参考作例として作り込みを進めた。左足の裙の巻き上げ部分に関しては、先述した通り園城寺像を参考にしながら軸足の衣文の形状を復元し、左腰の衣文の形状に関してはNo.002の造形を参考にしながら復元を進めた。(写真8-23)

最後に、欠失している乳首部材や肋骨の一部、衣文部の先端部分などを類例作品の造形を参考にしながら復元し、血管表現なども当初部材や参考事例をもとに復元を行い、室町時代の院派の制作像の特徴を意識しながら復元原型像を仕上げた。(写真8-24)



写真8-23阿形像粘土原型仕上げ



写真8-24 阿形像粘土原型完成

(3) 吽形像の復元原型制作

① 心棒の制作と粘土の荒付け

阿形像の姿勢および造形の検証がおおむね完了したところで、対になる吽形像の制作に着手した。前述した通り、吽形像には旧円覚寺仁王像の室町時代

当初の残欠部材が全く存在しないため、先行して検証を行った阿形像の姿勢、造形や参考作例の法住寺仁王像を参考にして、像の寸法、姿勢、体のねじれ方などを設定した。(写真8-25、8-26、8-27)

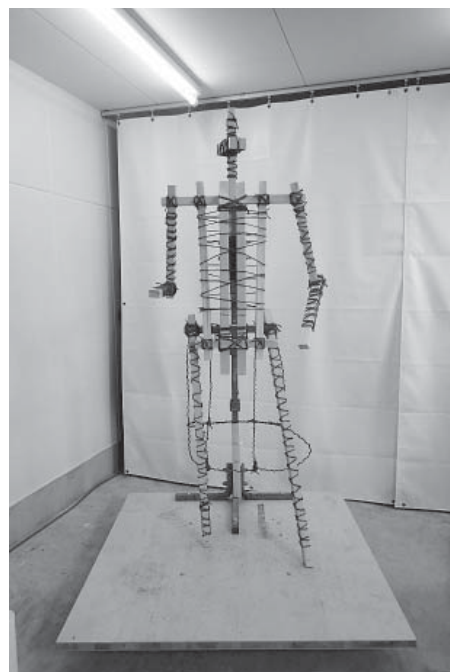


写真8-25 (左) 8-26 (右) 吽形像心棒制作



写真8-27 吽形像粘土原型荒付け



写真8-28 吽形像粘土原型中付け

②呬形像の粘土原型の中付け

阿形像と対になるように設定した心棒を軸に、全体に粘土を付けていくが、残欠部材の造形に起因する阿形像で特徴的であった体幹部の厚みや僧帽筋の隆起に関しては、呬形像においても同様であったと推定されるため、阿形像で復元した造形や法住寺像、惣見寺像を参考にしながら、体幹部の厚みや筋肉表現の粘土付けを行った。(写真8-28)

残欠部材No.007とNo.011は呬形像の左腕にあると推定されており、後世の修理部材ではあるものの、その姿勢や造形には室町時代の制作当初の様相が反映されている可能性が考えられた。そのため、腕の長さ、肘の曲げ角度などは、No.007とNo.011を参考にしながら左腕の復元を行った。ただし、No.007の肩口には蟻柄が設けられており、その蟻柄を垂直に立てると、左腕を前方に突き出したような姿勢となるため、曲げた肘を後方に引く姿

勢をとる通形の呬形像の姿勢とは異なる形状となる。No.007の蟻柄は修理時に設定されたものであり、室町期の仁王像の木組みの方法とは異なる可能性が高いと判断されるため、左腕の肩の付け方と姿勢に関しては、法住寺像や惣見寺像などの姿勢を参考にして復元することとした。

頭部、右手、両脚部、背面、裙部分などの後補部材も存在しない部位に関しては、阿形像の造形や類例作品を参考にしつつ、復元を進めていくこととした。特に頭部は、阿形像と同様に法住寺像をモデルにしつつ、分厚い体幹部に合わせた形状で首部を造形し、阿形像と造形的な差異がでないように留意しながら復元を進めた。

本稿執筆時では、呬形像の復元粘土原型の制作は中付け段階であるため、現時点での状況を報告したい。(写真8-29)



写真8-29 本論執筆時の呬形像と阿形像の復元粘土原型

8-4.復元制作のまとめと今後の計画

旧円覚寺仁王像の復元は、復元根拠となる残欠部材や写真などの第一次資料が乏しいため、同時代、同系統仏師による類例作例を第二次資料として参考にして、粘土による復元案の考察を行ってきた。その際、第一次資料である残欠部材の形状や造形的特徴などを最大限に把握することに努め、その造形的把握を延長させるかたちで、第二次資料である類似作例から導き出した像の姿勢や形状、または造形的特徴に反映させた。類例作例からの形状考察も、最も形状や制作年代の近い法住寺仁王像を参考にしつつ、他の摠見寺像や園城寺像も参考事例とした。さらに、造形感や時代感などの様相を適切に把握するために、本像よりも時代が遡る鎌倉時代作の仁王像や逆に時代が下る江戸時代の制作像なども参考にし、多角的な学術的根拠に則った復元制作を試みた。現時点では粘土による復元原型制作の最中であるが、より学術的に信憑性の高い復元を目指し、制作を続けていく計画である。

粘土原型が完成したのち、3Dスキャニングを行って表面形状情報を取得し、データ上で木組みのシミュレーションを行う予定である。その際、残欠部材の矧ぎ面や内割り面の観察はもちろんのこと、法住寺像や甚目寺像の解体修理の際に部材を分解した資料を参考にしつつ、解体修理が行われていない類次作例については透過X線撮影調査などを行って内部構造を検証し、旧円覚寺仁王像の木組みや内割りの様相について考察を進める予定である。

木組みを決定したのち、旧円覚寺像に使用されていた木材と同様のカヤ材を用い、粘土原型からFRPに置き換えた復元原型をもとに木材に彫り起こしていく計画であり、最終的には木彫による阿吽両像の完成を目指している。ただし、表面彩色の調査によって室町時代の制作当初の痕跡が確認できなかったため、今回の復元では彩色は行わずに木彫像を仕上げる計画である。

本論では旧円覚寺仁王像の復元に至る根拠となる状態観察、樹種同定、年代測定、類例作品調査などの学術的検証の成果について報告した。それらに基づいて行っている復元制作はまだ半ばであるが、木彫による復元制作の完成時には、3Dスキャニングデータを用いた木組みの検証や木彫制作の工程、ま

たは予定されている展覧会の様子などを含めた最終成果の報告をしたいと考えている。

9. まとめにかえて

琉球王国文化遺産集積・再興事業の一環として木彫分野では、戦災文化財のシンボルのひとつとして仁王像の復元制作を行っており、その完成は平成31年度を予定している。そのために、いくつかの従来の先行研究に最新の理化学調査を踏まえ、これまでにない新たな知見をいくつか発見することができた。

その一つが仁王像の残欠資料から剥落または採取したサンプルを用いた岡田・大山・門叶氏による樹種分析や年代分析である（本論5）。従来同一の部材だと思われたものが、実は、カヤ材（本土産）とイヌマキ材（沖縄産）の時代が異なる材（カヤ材15世紀±50年、19世紀±50年）が混在していることが判明した。

また、その彫刻の制作技術の面からも当初部材のカヤ材と後補部材のイヌマキ材とは、材の相違点に加え、血管表現など熟練の手わざの精度が異なることも指摘された。このことは、すなわち制作者が異なることを示している。琉球列島では植生がないカヤ材を用いたことと、円覚寺の創建年代と重複する年代から考えると、円覚寺創建当時に、大和の院派仏師など京仏師集団に制作を依頼し請来された可能性があることを示している。さらに、後補部材の中には、構造を改変した可能性が指摘されるため、現存する残欠片をもって当時の造りを想定できない難しさがある。実際に鑑賞する視点と、どのように作るかを考える、制作の視点は着眼点が異なり、制作者は彫りの一彫ひと彫りを決めるにあたり、微細な観察眼が求められる。そのことについて、岡田氏論考は指摘している。また、園部・山田・本多・宮腰の四氏により仁王像の顔料の色材分析の結果（本論6）は、文献史料の記述とも符合する興味深い結果が得られた。色材分析では、赤色塗料の部分から水銀、青色塗料の部分から藍・鉄が検出されている。赤色で水銀由来の顔料であれば水銀朱（銀朱）、青色で鉄由来の顔料であればベロ藍（プルシアンブルー）の可能性が高い。文献史料から琉球では、清朝から水銀朱（1767年～1875年まで断続的に輸入）

やペロ藍（1777年・1803年・1830年）の輸入は確認されている^{8・1}。特にペロ藍は18世紀後半から輸入の記録がある。

これは樹種分析で19世紀頃のイヌマキが使用されていることから、仁王像は創建当初からの像形が継承され、重修の回数は定かでないが19世紀初頭から中葉にかけて部位の木材を取り換え、彩色の塗り直しも実施する修理があったのではないかと考えられる。同時期の円覚寺を含めた王府の建造物の重修に関する歴史的な背景を考えると、中国では太平天国の乱、アロー号事件、アヘン戦争等の社会的な混乱と欧州列強の介入があり、首里王府は、円覚寺を筆頭に、諸寺へ中国の動乱鎮定に関する調伏を命じている（本論3）。調伏の儀式・儀礼の体裁を整えるために円覚寺の重修がなされ、総門の仁王像の腐朽部位の取り換えや彩色の塗り直しが行われたのではないかと考えることができる。

この頃王府は、たびたび起こった地震で崩れた首里城の城壁を補修し、琉球王国末期には、真和志町にあった中城御殿（次期国王の屋敷。現首里高校新校舎建設区域）を首里大中町（旧沖縄県立博物館跡）に移転している。王府は19世紀に入り王国崩壊の数十年間、様々な王府関連施設の重修・移転を企図・実行していた。

文献史料の記述と既述の科学調査の結果を比較すると、円覚寺を含めた仁王像の制作と請来、重修の歴史も垣間見える。いずれにしても、高温多湿の環境の中で、材質的に比較的堅牢度が高いカヤ材やイヌマキ材といえども、現存する両手、両足部分が後補材であることを考えると、仮に15世紀末に安置された仁王像が、19世紀の1回だけ修理したとは考えにくい。複数回の重修の中で、形の変容があった可能性は大きい。

現時点で、円覚寺総門の仁王像に関する具体的な記録は確認されていないが、今回の科学調査の成果と、円覚寺創建や近世期の王府の円覚寺で行った儀礼等の記録から、仁王像が創建当初から存在し、少なくとも19世紀頃に木材の取り換えや彩色の再塗装を実施していたことが年代測定分析と色材分析から判明した。特に、この確認された19世紀の重修時は、王府関連施設の移転・改修が行われた時期と重なることも特徴であり、戦前に仁王像をみた人々

は、直近修理の仁王像を見たことになる（本論4）。

今回の復元にあたっては、15世紀末当時の仁王像の復元を決めた。それも院派仏師の手によるものとして考えることにした。その根拠については、本論7（長谷氏論考）でも指摘しているとおり、岡田氏の作り手としての卓越した着眼によるところが大きい。さらに、その作造については、長谷氏の近世仏像を数多く調査研究を行ってきた識見に基づき院派仏師作像の詳細な論述をいただいた。これらが円覚寺金剛力士像の復元を行う上で、重要な参考資料になっている。

円覚寺仁王像に関しては、大和仏師の手わざと、それを手本にして後補部材の重修した琉球人の手わざがあった。戦前、古老たちがみた仁王像と今回制作される仁王像との間には、若干のイメージの乖離が生じる恐れがあるが、15世紀末の琉球王国を代表する巨刹円覚寺仁王像の復元は、現在、私たちが学ぶことができる多くの知恵と先人の思い、そして70数年の歴史を越えた残欠資料がもつ力を組み入れ、当時の彫刻技術を現代に甦らせるものになることを期待したい。

本稿は、仁王像制作2年目の制作途中にあるが、残り2カ年間で完成できるよう、仁王像制作の意義と現在の進捗を報告するとともに、当館が取り組む琉球王国文化遺産集積・再興事業の一端を紹介した。

註記

2-1 『沖縄県文化財調査報告書第140集 平成11年度歴史資料調査 旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』（沖縄県教育委員会 2000年）

3-1 本論5・7・8参照。

3-2 新垣裕之 伊良部一史 新里涼子 上江洲安亨「中城御殿御普請図の翻刻」『首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報No.2（平成22年度号）』（平成24年3月 財団法人海洋博覧会記念公園管理財団）

3-3 高良倉吉「近世銘蒔家をめぐる諸相」『伊是名村史 上巻 島のあゆみ』（平成元年6月 伊是名村）

4-1 『残欠資料等活用可能性調査 旧円覚寺仁王像の残欠資料に関する調査報告書（内部資料）』

38-45、121-149p.p. (沖縄県立博物館・美術館 2015年)

5-1金子啓明, 岩佐光晴, 能城修一, 藤井智之 (1998) 日本古代における木彫像の樹種と用材観一七・八世紀を中心に一. MUSEUM 555, 3-53.

5-2林 弥栄 (1969) 『有用樹木図説』, 誠文堂新光社, 東京.

7-1 『琉球国由来記』 卷10 「諸寺旧記」・「天徳山円覚寺附法堂」・「肇創天徳山円覚禅寺附重修事」。

7-2 室町時代の院派仏師の動向に関しては根立研介『室町時代の彫刻』(『日本の美術』494、至文堂、2007年7月) に詳しい。

7-3 「雨森善四郎氏所蔵文書」 乾 (東京大学史料編纂所編『大日本史料』6編之5、東京大学出版会、1969年9月) 598頁。

7-4 「天龍寺造営記録」 (東京大学史料編纂所編『大日本史料』6編之7、東京大学出版会、1983年1月) 410頁。

7-5 横浜市歴史博物館『中世の政界に誘う仏像一院派仏師の系譜と造像一』(1995年11月)。

7-6 熊田由美子「東大寺南大門仁王像の図像と造形一運慶と宋仏画」(『南都仏教』55、1986年3月)。

7-7 横浜市教育委員会『称名寺木造金剛力士立像修理記録報告書』(1971年3月)。

7-8 珠洲市教育委員会『法住寺史料調査報告書』(1999年3月)。

7-9 田中喜作「本朝大仏師正統系図并末流」『美術研究』11 (1932年11月)

7-10 猪川和子「研究資料 大仏師院勝作京都仲禅寺金剛力士像」『美術研究』313 (1980年3月)。

7-11 京都府竹野郡役所編『丹後國竹野郡誌』(『京都府郷土誌叢刊』第10冊 (復刻版)、臨川書店、1985年3月)。

7-12前掲註7-11によると、仲禅寺金剛力士像修理中である宝暦3年7月7日に仏師が琴引浜へ遊びに行った帰途、平八が離池(離湖)で遊泳中に溺死し、水谷作之進は平八供養のために仁王像再興代銀2貫300匁を吉祥院に寄付したという。

7-13 山本勉『南北朝時代の彫刻一唐様の仏像と伝統の残照』(『日本の美術』493、至文堂、2007年5月) 及び前掲註7-2。

7-14岩田茂樹「園城寺大門の仁王像」『佛教藝術』201 (1992年4月)。

7-15神仏います近江展実行委員会『特別展 神仏います近江』(2011年9月)。

7-16猪川和子「新知見の南北朝時代在銘像」『美術研究』280、1977年)。

7-17 前掲註7-2及び岩田茂樹「京都・本光院の祐弁作地藏菩薩坐像」『博物館学年報』26 (1994年12月)。

7-18 名古屋市博物館『仁王像修復記念 甚目寺観音展』(2011年7月)。

7-19 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『宿院仏師 戦国時代の奈良仏師』(1998年3月)。

7-20 東大寺統要録研究会編『東大寺統要録』(国書刊行会、2013年5月)。

7-21 倉田文作『仁王像』(『日本の美術』151、至文堂、1978年12月)。

8-1上江洲安亨「琉球国で工芸品に使用された原材料に関する考察」『越境する東アジア島嶼世界一第15回琉中歴史関係国際学術研討会論文集一』琉球大学国際沖縄研究所発行

謝辞

ヒアリング等に協力された方々に謝意を表する(敬称略、順不同)。

渡慶次朝裕、神村朝順、野原住江、吉田朝啓、安次富朝昭、伊良皆玲子、平良臣子、田端國男、能山宗忠、永岡理秀、名嘉山ツル、安次富津留子、照屋苗子、上原スミ子、玉城照子、国頭秀子、玻座真貞子、久場とよ、山元文子、山田芳男、中山東、嶺井浩、喜納大作、豊見山愛